

る變化の結果である。何となればかの發達は與へられたる世界の内部に於ける移動を意味せずして、寧ろ之に一個の新たな世界即ち自己活動の世界を對峙さすからである。此所には一切の偉大と財とは變化して、自然的社會的共同生活に於ける單なる自己保存の代りに、吾人の範圍に於ける内心全體の復活といふことが吾人の努力の最後の目的となる。かくて生は自己への轉向を完成し、且つ一個の深さを造り出して始めて一個の内容を得、而して獨立することが出来る。又こゝに始めて自己の中に根柢を有する現實が顯はれて來るのである。夫故に吾人は此新なる生の中に他の多くのものと共に特殊なる生活を維持しなむ、唯生の完成を主とするのである。眞正の生はたゞ此内心の獨立に由りて一個の精神を得たる生活のみである。這の生が漠然たる輪廓に止らぬといふことは其の眞善美に於けるが如き特別なる方向への發展の中に顯はれて居るのみならず、又藝術、科學、法律、經濟等、吾人の前に横はれる多くの生活範圍の形

成の中にも顯はれて居るのである。是等のものは決して一般的思想の單なる應用にあらずして、獨立的内心の特有なる發達である。而してかの思想を漸々先へ進めて行けば、そこに精神生活の獨特なる開發、根本的啓示、人類の大なる經驗はあるのである。是等のものは單なる人間から起つても來ねば、又人間の本性を高めもせぬ、寧ろ其を彼の中に發見せしめ、彼に新しい連絡を指示し、新しい運動と内容とを與ふるのである。又文明の概念はかゝる變化と共に始めて一個の明かなる意義と根據とを得る。文明が單なる自然の假定され且つ束縛されたるに對して生を活動の中に移すことを意味するとは既に其の名稱が明かに之を言ひ顯はして居る(文明 Kultur てふ言は羅典語 colere てふ動詞から來たので、それは開懇、耕作することを意味する)而してこれは一般の確信に一致する。しかし今やかの活動は如何に理解すべきかてふ問題が起つて來る。もしそれが與へられたる生存の内部に於ける單なる整齊移動であるとすれば、それからは

決して或る根本的に新しいものは出て来ない。さらば果てしなき骨折に報ひられるとなく結局生活の全體は全くの空虚に終るのである。唯文明の中に烈しい變革が行はれ、單なる活動は自己活動といふ所まで深められ、而して一個の新しい生活、一個の新しい世界、一個の新しい人間を造り出すまでに強くせらるゝ場合に於てのみ文明は人間の勞作及び精神に對して存在の理由を有し、且つ多くの時代の重疊と益々増大しつゝある紛糾とに對して活氣と正純とを保持し、而して數千年の經過の中に當然益々管々しく且つ古くさくならうとするに拘らず、愈々新たにさるゝのである。すべて斯ういふものゝ中に生の溢るゝばかりの充満、凡ての状態の變化の要求が顯はれる。而してそれと同時に有ゆる雑多のものは唯一の問題即ち生の獨立自存及び現實の靈化てふことの中に包括されて了う。

斯くて吾人の出發點たる疑問は一個の肯定的の解答を見出した。實際人間の

範圍の中に生の獨立が出来、其中に一個の新しい世界が顯はれた。此世界は又自己の生活を形造り同時に内的安定、一切の闇黒と一切の反對に對して超越性を與ふ所のものである。しかし此生活發展が人間をして全然元の性質を超越せしめ、加之ならず之れと烈しく衝突し始めるとせば、それは決して單なる人間の所産であることは出来ない、吾人は寧ろ其中に萬有の活動を認めざるを得ぬ、人間の中に現はれて来て其協働を要求する新なる生の階段の發顯を認めざるを得ぬ。『生の全體及び獨立自存への運動はかゝる制限せられ且つ分離されたる個性たる吾人に在りては、若し現實が一個の全體を形造り、其全體から生が出て来ないならば、決し起り得なかつたであらう。即ち一個の人間を超越したる精神生活が成立ち、而して此者が發顯して彼の本能其物とならねばならぬのである』

「生の意義及び價值」

此の確信は世界及び其運動の全體を獨特の光彩の中に顯はし、それと同時に

人間の生活及び事業をも其中に輝かすのである。而して與へられたる殊に自然から定められたる世界は現實の一階段として顯はれ、それを踏越えて運動は更らに精神生活の階段に高められ、同時に又獨立自存を得るのである。しかし人間の中には此兩階段が互に相衝突し、人間は先づ自然によつて靈性に高め、而して新しい生活と本性の獲得と共に世界状態を進めて行くことが出来る。

然し人間はかゝる生活に與る者として、萬有の全體及び根抵と内的結合を遂ぐるとに由りて始めて有ゆる時代の紛糾並に現代のそれを大膽に正面から見る事が出来る。吾人は動搖の眞只中に立つて居り、且つ現實の一個の全階段は他のものに混ずるのである。故に多くの紛糾や、反對や障礙が起るのは固より怪しむに足らぬのである。而して是れ亦人間の状態に對して危機が起つて居ることを明かに會得せしめる所のものであつて、之れは更らに方向を轉じて最後の根抵を捕へ、而して更らに新なる努力を要求する所のものだ。しかしかゝる根

抵が實際あり、且つそが吾人に向つて作用を及ぼすならば、吾人は其中に確固たる支持を得且つそこに生活の枯れざる泉を見出し、かくて又現代の分裂紛糾に對し、善き信仰の動搖及び其否定の傾向に對して勇ましく戰爭を挑むことが出来るのである。此戰爭は實に吾人の望む所のものであるのみならず、其中には實に單なる人間の力よりも遙かに強い力が活らいて居る。

第二章 宗教への轉向

一 普遍的宗教

是迄の觀察は悦ばしい餘音を以て終つた。吾人は此喜びをいつまでも保存したいものであるが。しかし事柄は其様に單純なものではない。恰かも吾人を安全にし且つ高上せんとしたるものが更らに大なる紛糾を喚起するのである。なせならば設令人間の範圍内に獨立の精神生活が顯はれたとしても、それが人間

の主なる世界となり、彼の精神の根柢を動かし、而して其處から彼の努力を支配するまでに至つた譯ではない。此人間に向つて來りつゝある新しい世界が彼に於て之を我物とするに必須の力を見出さず、此世界が人間の仁核となるべき筈であるのに尙ほ其の邊縁だに觸れて居らぬではないかてふ古い歎きはまた實に止まぬではないか。此新しい世界が實際人間の十分なる歸依を得ずしてゐるとすれば、其内容も亦漸々衰へて來て遂に朦朧として了はねばならぬ。何せならば、若し既に外部の事柄ですら之を十分に明瞭に見やうとするのには大に注意の眼を張らねばならぬとすれば、見るべからざる偉大及び財の範圍に於ては、精神の歸依を得なければ猶一層曖昧且つ不確實でなければならぬ筈だ。斯様に力が薄弱で内容が貧弱な状態に於ては靈性は得て單なる影のやうに見ゆるもので、それは吾人の生活に附添ふて來るにはくるけれども未だそれを動かすとは出來ぬ。それ故に人が其全體を一個の單なる想像として説き去らうするのは決

して無理ならぬとである。しかしそれも大間違である。精神的生活が如何に吾人の範圍に薄弱なものとしても、そが決して單なる想像でないといふことは、其内容の特徴が十分に之を示して居る。單なる自然よりしては如何に大膽なる想像と雖も到底それに達することは出來ぬのである。されば人間が彼の生活から遠く隔つてゐるならば、其間隔が即ち彼の生活に觸れしめる所のものだ。しかし乍ら、若し一の星が吾人の眼に蔽はれ見えなくなつたからとてそれで未だ其星が既に没して了つたといふ譯ではない。

しかし此状態は勿論人間を逆も長く忍ぶことの出來ぬ大なる反對に到らしめる。新しい生が人間のものとなり、其生活に先づ一個の内容を與へつゝあることは、最早争ふべからざる事實である。しかし同時に彼の生が彼に開顯さるゝ絶頂まで攀ち上る力を得ぬならば、彼の生の内容と力とは失はれて了う。丁度彼に無くてならぬものが遠く離れて無關係になつて居つて、一個の頑硬なる障壁

が彼に於て日常の意思、働作と一個の遙かに深い、而し觀たといふよりも寧ろ豫想したものとを別つやうに思はれる。此新しい生がたとへ影のやうなものとしてみても、猶ほ其標準によつて吾人の普通の生活を律するには十分の力がある。しかしそれでは吾人に何等の新しいものを與へぬ、吾人は唯遠方に生の流れの音を聞くのみであつて、それに這入る入口を見出さずにあるのである。そこで、彼の新しい生は吾人の生であるやうでもあり亦ないやうでもあり、吾人に無關係で居つて、而かも棄てるに棄てられずにある譯である。

最も深奥なる精神に於ける此の分裂、内容と力との脱落は第一に疲倦と不眞と及び普通の文明生活を貫通して居つて、又各個人の精神にも及んで居る、不満足の罪に歸せねばならぬ。なせならばそれに一個の偉大を與へた人格の發展、精神的個性の形成といふものは、今や別な種類の生活の薄弱なる附屬物とならうとして居るからである。或る一定の意思はそこにあるけれども、而かもそれが完

成に至るには未だ足らぬのである。

精神の特徴及び偉大が愈々高く考へられ、ば考へらるゝ程、人間は益々自分との間隔が遠くなり、紛糾が益々甚しくなるやうに思はれる。そこで眞の精神生活は一個の自我を形成するに由りてのみ活動し始むるのであるといふ確信の行はるゝ所に、又其活動が多くの力の單なる運動でなくなつて一個の内容を得んが爲に全く自己活動となる所に、殊に十分の力を感じねばならぬのである。しかし自己の本性の中にかの分裂があるやうではそれは到底難かしい。そして眞實の生の期望は凡てそれと同時に無くなつて、それに達せんとする一切の努力は全く挫折したやうに見える。

しかし實際に於ては其努力はまだ挫折して了はない、而して精神生活、然り單に陰影假相のみでない眞正の精神生活は人間の範圍内にも維持された。眞正の文明は有ゆる反對があつたにも拘らず起つて來た、而して多くの時代を通

じてそれが支持されて居る。藝術や科學や法律や倫理といふやうなものは益々發達して其各自の世界を形造つた。人間の精神も亦かゝる運動に携はつて居るのである。しかし人間の精神の中には高いものは低いものから自分を區別してそれと戦ひつゝあるのだ。それは抑もどういふ意味か、吾人は次に之を論じて見たい。

彼の精神生活が人間の力を漸々膨脹することによりて現はれて來やうとしても、そこには底知れぬ淵があり、反對は餘りに烈しいのである。それならば唯人間の中の靈性が精神生活其物の全體から生氣を吹込まれて、獨立にまで高められると、斯様に事柄を理會せねばならぬ。全生活(Allleben)其物が直接吾人の中に現はれ、其現在によりて吾人の能力の微弱、吾人の動機の微小を超越することが出来る。是れ吾人が前に遙遠方から眺めて居つた生の流れの中に吾人を移し、吾人の本性の深さから吾人を引離して居つた障壁を打破する筈のもの

だ。かくして始めて精神生活は吾人のものとなり、而して本來の力を以て吾人の中に滾々たる泉となりて噴出する、かくして始めて吾人は世界的運動に於ける獨立の生活の中心點、精神的精力、又其協働者となるのである。さらば此精神的ものは吾人に取りてもはや或る半ば異物、又は殊に種々の問題や要求を以て壓制を加へるものでなく、今や全く吾人の自己本能となり、而して吾人は之に對して自由の關係にあることを感ずるのである。そこで又それが爲めの働作は今や全く自己の目的となり、而して吾人は特別なる己れの趣味を求めずとも、そこに直ちに純粹なる喜びを以て滿されることが出来る。しかしこれは凡て自然的進化といふものゝ結果ではなく、寧ろ人間が全體の力から高められることに由り、即ち宗教への轉向によりて來るのである。是れ即ち人間の中に或る高いものが顯はれ、而かも始めの状態に對しては阻害され束縛されて居つたといふ宗教の假定である。しかし宗教はかゝる阻害や束縛の征服に外ならぬ。

彼の運動全體は人間の平均の發動ではなく、却つて此平均の斷乎たる除去に由りて起つたので、平均は取も出さず生活の破壊若くば中絶を意味するのである。此の對照は宗教の本質に屬するもので、宗教は第一の状態にして反對するとなしに、又生活の組織を新たにすることなしには全くあり得べきものでない。其意味に於て宗教は一個の天啓且つ奇跡である、之れなしには宗教は到底考へられぬ。斯の事柄に關して今日行はれてゐる觀念の混雜は却つて多くの人々に對して所謂『內在的』宗教に引力魔力を與へて居る。彼等はそれと同時に宗教の貴いものを保持し、而して多くの紛糾に對抗し得ると思ひ、しかもかゝる轉回が宗教に於ける緊要且つ貴重なるものを破壊することを氣付かぬのである。それは即ち與へられたる状態の紛糾よりの解脱、及び前に小なる人間的のものに結付いて、それに由りて壓迫されてゐた靈性の高擧といふことである。これは宗教の最も大切なものでなければならぬ。斯る內在的宗教の代用物と見間違ひ

られるやうな多くの代用物に對して一寸と見ただけでは宗教から遠ざかつて居る人々に於て行はるゝが如き宗教の働きの不決定的な觀念を與へるのである。彼等はかの神の力によれる制限が人間を小なるものとして、彼から一切の自由を奪つて了うと考へた。しかし實際は全く之と正反對で、此轉回なしには偉大もなければ又自由もないのである。何となれば精神生活が以前に人間の平均の闇黒なる混淆に全く結付いて居つた偉大殊に內的種類の偉大が發顯することを得なかつたからである。それには彼の状態から脱却すること、一個の超越的全體の力から發する働作と生活とが缺くべからざるものである。かくてこそ人間の無限の生の溢れを汲み、かくてこそ彼は自己の中に確固たる基礎を据え、而して個々の性質の總括によりて働作の範圍全體を浸潤する一個の精神的特質を發展することが出来る。若夫、自由に關しては、人間を自由獨立の中に入れることと、精神の大なる事業に全く自働的に携はるやうにすること、が宗教全體の

核心でなければならぬ。宗教の言葉を以て言へば、即ち自由は恩寵の最高の實證である。確かに其の中に創造的の力が興へられる秘密があるに相違ない。しかしこれは同時に説明することの出来ない秘密であることは明かなる事實である。其の中に生涯の勞作の一切の勇氣、一切の力の根柢がある。吾人の生活はそこから出發して始めて眞に自分の生活となり、確かに元氣よく新なる生活を始め、不朽の青年になれるてふ希望を得、亦全く別な眼を以て世界を觀察し、マイステル、エウクハルトの『吾人は神を求むるに、夜の目を以てせずして朝日の中に求めねばならぬ』てふ言を理解する事が出来るのであらう。されば宗教から發し來る精神は決して不安心な壓迫されたものでなく、寧ろ堅固なる又快瀾なるものである。これは世界の狀態の不足を發見するが、しかしそれに由て先づ超越性の意識を獲得する一個の精神である。かゝる堅固と歡喜とは最も密接に尊敬と感謝とに結付いてゐるのである。而して若し此所で人間が偉大の意識を

有して居るならば、それは却つて彼の空虚なることを示すものであつて、決して偉大でも何でも無い、『我等は何の受領もたらざる物を有か』てふ言が此所でも最も適當なる意義を有して居る。

此所から觀察すると凡の精神的文明は自己の中に宗教、即ち超人間的力に支持せられ、勵まされ支配せられ、且つ指導せられてゐるといふ意識を含んで居る。さらば此精神的文明はそが分岐する有らゆる個々の範圍と共に宗教の爲めには有力なる證據である。斯の如く超人間的力に由りて支持せられ且つ支配せらるゝことは精神的活動の頂點に於ては人間の能力と精神的功蹟との距離最も大なりしが故に亦最も強く感せられたのである。有ゆる範圍の創造的な人々は、殊に傳來の宗教に對して最も峻烈に反對せし者と雖も亦、同じく見えざる力から指導せられ、保護せられて居ると感じた、それ故に彼等の活動は内に已むにやまれぬものがあつたのだ、此力は有ゆる疑惑疑問を全く征服し、それと

同時に彼等に凡ての圍繞界に對して超越せることの確かなる意識を與へたのである。

斯の如き依屬と獨立とをして相即不離の關係にあらしむる意識は各種の生活範圍と全く異つた性質を以て構成されて居る。即ち大藝術家と大思想とは自づから殊つた意識を有つであらう。大藝術家は猶ほ直接に其創作を或る授けられたもの又己れ自身の上に高めるものとして感ずるであらう。しかし偉大なる思想家と雖も彼等に内在する必要を有ゆる周圍、有ゆる傳説に平氣で對抗し得んが爲に此必要が彼の特別なる種類の偶然に於けるよりも一層深かい根柢を有つ居るといふ確證を要しない、而して無神論に於て満足さるゝやうな現實の全體を包擁する偉大なる思想家は殆んど無かつたといふことは全く理由のないことであらうか。政治家や勇將などに於けるやうに働が外に向つて行く時には人が從屬して居ると感じて居る超越的力は寧ろ運命の特色を取つた、それは人間

を用ひ得る間は彼を守り且つ高め、彼の事業が終れば直ちに彼を下に落す所のものだ。しかし茲にも亦人間にありては行爲及び其成就は單に彼れ自身の上のみに立つて居らぬといふ確信が一種の力を有つて居る。しかし乍ら生活が内部に向いて行つて、其運動の中に内的獎勵を求むれば求むる程、宗教も亦益々精神的なもの及び倫理的なものに轉回して行くのである。

けれども此超越的力の働は人類の頂點で制限されて居らぬ、寧ろ生活の範圍全體を浸潤し、而して個人個人に於ても、將又文明全體の建設に於ても力あるものである。其働はしかし生活の高舉改造に於ても、初めは單に外部的であつたものが内的力に轉化するときにも、人間が自己の動機以上に高められる時にも、又小我から解脱して新しい連絡の生じた時にも能く顯はれて居る。カントが天才的力を以て認識に對して完成したるコペルニクスの轉回は實際に於て世界歴史の有ゆる勞作を通じて行はれつゝある。即ち生活は最初全く外の方へ

向いて居つて、そこに功蹟を見出さんとして疲れ果てたのであつたが、漸々内心を造り出して来て、そこへ其の重心を移した。今や内部のものが外部のものから見られ且つ取扱はれずして、益々外部のものが内部のものから見られ且つ取扱はれてゐるのだ。これは單なる移動を意味せずして、一個の大なる根本的變化を意味することは、歴史の經驗が明白に之を示して居るのである。

此事實は人間と事物との關係に於ても又人間同志の關係に於ても現はれて居る。生活の經過は物も人も共に吾人に取つて一個の新たなる意義を得させる。吾人は各々目的の事柄の爲に働きつゝあり、而して其事柄に沿うて先づ吾人各々の利益の爲に吾人の勞作を發展して行くのである。若し有形上の生活保存の絶えざる要求が吾人にかゝる事物の利用を爲さしめるものとすれば、吾人は全く別なことを爲し得ぬであらう。しかし最初は單なる方便に過ぎなかつた勞作は生活の經過中に吾人に取つては自己目的となつた。吾人は事物の成功を期望

する、しかし吾人は又吾人自己の満足を其の要求の下に置くことか出来る。勞作が個々の功蹟を超越して一個の全體に結合され、それが人間にに取りて一個の生涯の天職となり、而して斯るものとして一個の確乎たる特色が出来れば出来る程、其勞作なるものは益々人間に取つて前の微小に對する内的支持となり、保護となるのである。かくて生活は勞作に沿ふて愈々高く上つて行くのである。

個人に對して價値を有するものは人類の全體に對しても亦價値がある。茲で問題に上るものは文明の建設でふことである。實際人間は先づ第一に自己の利益と趣味とを主眼として、多くの現象を觀察し、其の經過に對して生存競争に於ける敵の勢力に反抗することを得、且つ闇黒の世界を遁れ出づる道を見出さんが爲めに其經過に對する法則を求めたのだ。しかし漸々智識研究が進んで來るに隨つて單なる利益といふことから遠ざかつて、竟に全くそれから離れて了ふ。斯くてこそ始めて學問が可能になる。而してそれは嘗に自己の必要を

發展するのみならず、又之を發展する爲に人間の力を得、人間を高めて眞理の探求の爲に小なる我慾を忘れしむるとなるのである。藝術や其他の範圍に於ても亦之れと同じやうなことが行はれる。かゝる總てのものに於て眞の精神的と單なる人間的文明即ち單なる人類の目的と趣味の爲にのみ構成されたる文明の勞作との分離が完成される。此の人間の文明は精神的文明の現はれると共に決して消えて了はない、而して外から見ると往々兩者が互に相一致するやうであるけれども、實際に於ては兩者の間に大なる隔たりがある、否、全く大なる撞着があるのである、人間的文明は不斷に精神的文明から力を得、之れなしには全く成立しない、而して個人的努力の混雜は決して文明の光に邂逅せぬであらう。

生活の内の高擧は人間と人間との關係に於て一層明瞭である。人間を愛と友誼とによりて互に相結合するものは始めは可なり外面的な又一時的なものであ

るが、しかし其關係が固くなり、生活の共同といふことが發展すればする程、一の人間は他の人間を益々愛し又彼自身の爲に價値あるものとなり、共同的生存は益々それ自身既に一個の高い善となり、愈々精神的内容を得て、利己的狹隘に反抗するのである、かゝる教育し且つ高める生の力は、共同的生存の一層廣い範圍に及んで居る。人間が互に大なる團體を形造る所以のものは、始めは確かに必要と利己とに其動機を有つて居るに相違ない、しかし國民や國家が發展するに及んで遙かにかゝる境界を超絶して了つた。共同的動作、共同的經驗、共同的成功、共同的艱難等は多くの精神を打つて一團となし、而して内的結合を産み出すのであつて、之れは自己の趣味をのみ追求するものに力強く反抗し、且つ人間をして無我の勞作に従事せしめ、然り又歎んで團體の爲めに献身せしむるのである。爰に生じたる共同心は即ち眞の愛國心を燃やす焔であつて、それは單に個人的趣味の總體を遙かに超絶して居る。かゝる内心の強くなり且つ

高めることは人類の全體の上にも及んで居る。吾人が同じ遊星に棲息し、且つ互に同じ勞作を分擔するといふだけでは、吾人が內的に相結合し互に眞の同情と愛とを起すには未だ甚だ不十分である。それには又人間が高められて、新たな力が這入つて來ることを要する。唯だ吾人を總て根本から包括し、而して一切の頑硬を融解する一個の生のみ眞正の人道、慈悲、同情及び愛を産み出すことが出来る、之れはしかし乍ら大なる目的に對して頗る僅小の意味を有する單に主觀的の氣分の一時の衝動としてなく、全く一の人間をして他の人間と同じやうに感せしめ、且つ悲喜を共にせしめ、加之ならず又一の人間の生活を直接他の人間のものとなす所の内部より發する力ある流れとしてある。此所では凡て個人の生活の運命は全體の運命からして生氣を與へられ、夫れによりて輝かされ、高めれるのである。而してこれから世界史的波瀾が起つて來るといふことは世界的宗教が之を示して居る、即ち佛教の如きは慈悲を主件となし、

基督教の如きは愛を要件となして居るのである。

是は總て最初の状態の征服變革を意味する。しかし最初の状態に對して或る根本的に新しいものが出來たといふことは懸て又彼の高擧の後と雖も低いものが猶ほ續いて居つて、生活の廣い部分を占領し、其の弱小を以て上昇に反抗しつゝある事實をも傳ふるのである。そこで高いものは益々烈しい戰爭を續けねばならぬ。しかしそれは恰かも個中に其の獨立、本原を示し、且つ其の一層深い源泉から發顯せることを示してゐるのである。

他の一面に於ては又人間の生活の働は同時に人間の中に又人間に反對して靈性に達せんとする運動の中に顯はれて居る。此運動は歴史を貫通するもので、敢て其全體を充たしてゐるといふ譯ではないが兎に角平均に反抗して働く一個の高さを形造りつゝある。歴史とは與へられたる要素の單なる移動や結構といふことでない、實に生活の內的變化を完成し、新なる深さを現出せしめ、且つ

生活の内心を著しく生長したる所のものである。此意味に於て歴史は全體として内心の世界を造り出すことだ。人間が單に其の所有となりしものに止まらずして、強いて新しいものを求め、且つ之を往々最も激烈なる努力奮闘に由りて能く大なる反對に打克つて成就せんとするのは抑も如何なる譯であるか。それは實に生の内的衝動、生の一層大いなる内容及び獨立自存に對する猛烈なる渴望に由るのである。かゝる衝動は單なる人間からでなく、唯彼の中に自ら輝いてゐる生からのみ出て來るのであつて、之れが人間其ものゝ深さを求め且つ自ら之を完成する所のものだ。總ての範圍を通じて精神生活が愈々益々獨立し、愈々益々外部に對しての關係を斷ち、且つ益々自己に其の内容を與へつゝあることを認むることが出来る。例之ば古代の頂點に於て満足されて居つた倫理は其末葉に於ては最早満足されぬ、況んや新たに起りつゝある基督教に於てをや。アウグスチンの如き人すら實に烈しい言を以て古代の道德を立派な罪惡とま

で (virtus veterum splemita vita) 謂つて居るではないか、之れは嚴格なる意味に於ては確かに誤であるに相違ない、しかし古代の倫理が自然に反對した一個の新しい生活を造るといふよりも寧ろ既に在る自然を發展し且つ之を高めることを期したといふことに於てはアウグスチンの言つたことは大に理由があると思ふ。智識の努力は全く之れ異つて居る。古代に於ては思想勞作と物質上の觀察と互に一層相接近して居つた、而して精神的偉大も亦凡ての物質上のものを棄てなかつた、それに續いて中世紀も矢張さういふ風であつた。近代に於て始めて両者が截然と分離されて、精神的のものは十分なる獨立を得、物質的のものは精神的のものから支配さるゝといふことになつたのだ。此所では敢て靈性の獨立が他の夫れを廢止するといふ譯ではないが、しかしその地位と其價値とを更へ、而して衝動の全體の中に一層多くの運動と固有の衝動とを持來すのである。此運動の經過は到處に昔時十分満足せられたるものを全く不十分の

ものとして棄て、而して最初其全體のものと思はれたるものゝ上に精神生活の繼續を顯はして居るのである。

然しかの向上は個々の枝葉の上に限られずして、更らに生活の全體の上にも及んで居る。何となれば此全體の爲にも亦多くの戦が爲され、而して之に由りて其は不斷に個人個人の思考意思を超越して段々と進歩しつゝあるからである。實に精神的運動は破壊を以て始まり更らに又鞏固なる結合を得、それと同時に一個の明晰なる凡て個々のものに獨特の形を與ふる特質を得ようと努めてゐるのだ。かゝる結合は吾人の文明範圍に於ては先づ古典的古代の絶頂で完成された。しかし其の現實の藝術的構成は精神生活の到底永く忍び得る所でない、なせなら、其れは更らに進んだものを持來し、更らに進んだ問題を起し、更らに進んだ要求をするからである。此の新しいものからして自づから彼の連絡は弛み、而して其要素は互に全く相分離し去らんとして居る。かくして基督教の宗教的

世界の中に再び一個の新たな連絡が生じ來るのである。しかし吾人は此ものも亦大なる反對に突き當り、而して之に對して多くの動搖と懷疑とを経て遂に科學の上に基礎を据えた現代の生活系といふものを形造つたことを認めざるを得ぬ、しかし此生活系も人類の經驗の外面的膨脹に對しては內的に餘りに狭く且つ小さい、そこで吾人は今日復又其破壊を感せざるを得ぬやうになつた。しかしそれと同時に一個の新たな連絡を求めんとする努力が起つて來る。其後創造的及び批評的、包括的及び分解的時代が相次いで起つて來た。しかしそれは皆畢竟一の全體を通じた運動の斷片に過ぎぬ。又始めは一個の否定と思はれ、又實際否定として出で來たものは、遂に肯定に歸入し、而してそれは全體を追求して新なる綜合を造り出すのである。更に又創作的時代もある一定の律調を示して居る、即ち精神生活の運動は益々世界の中に這入つて行つたが、其後又そこから再び自己に戻つて來たのだ。丁度それと同様に、古代希臘の運動は世

界の全廣袤を包擁し且つ之を形成して居つたが、基督教の仕方は精神生活の獨立を維持して、益々それを深めて行つたのだ。又それは更らに新しい、更らに強い力を以て近代を世界に於ける不安なる勞作に追詰めた、併し吾人は今や再び精神生活の一層の自己集中に對つて強烈なる渴望を感じつゝあるのだ。人間から見るならば之れは大なる不安定の印象を起すでもあらうが、實際に於ては肯定否定並に膨脹集中の範圍を通り越して唯一の大なる運動がある、之れ取も直さず人間の範圍に於ける精神生活の探求發現てふことである。しかし其の衝動や力は精神生活其ものから出て來ないで實にどこから出てくるであらうか。彼の運動に伴ふ多くの動搖變革は人間に取つて決して都合のよい愉快なものではない、それは往々にして人間の幸福を無遠慮に紊し、言ふべからざる多くの懷疑や、心勞や、困難の中に陥れ、而してそれは又不和や憎惡や鬭争を起し、以て人間の生活をして非常に不安ならしむるのである。しかし乍らそれと同時に

に人間に一個の偉大を與へ、其生活に内容を與ふる所のものだ。若しかの月てを取り去つて了ふならば人間の生活は如何ばかり貧弱にして、如何ばかり無意義であらうぞ。然らば人間をして今や強ひて此鬭争を爲さしめ、且つ彼をして其の偉大をば彼の幸福に直接反對するものゝ中に求めしむるものは何であらうか。それは外ではない、人間の範圍内に於ても亦獨立の靈性が獎勵さるゝこと、即ち人間自身の本性の核心を形造つて居る高い力である。此所にも亦向上は平均的生活に著しく反對して起つて居る、そは彼は全體から全體への運動を促がし此は個々の元素の間に動いて居るものなるが爲めであり、又そは此者が持來し得るよりも全く異つた偉大と財とを發展するが爲めである。かくしてかの世界歴史を包括し且つ結合する運動に伴うて刹那より刹那への、又人間時代より人間時代への不定なる動搖が残つて居る、而して此所からして全體が雜然たる渾沌のやうに見えるのである。

かくて人生の全體を通じて獨立且つ眞正の靈性の發顯が出来るのであるが、それは單なる人間の能力に由るのでなく、全く神の靈の現在によりて生ずる能力の増大に由るのである。又それは事物の全體の廣さを通じて來るものでなく、寧ろ之れに對する反對運動によりて來るのである。是を以て眞の精神生活は人間の範圍に於ては宗教、殊に一個の人間の意識に對して往々先天的とも謂つべき宗教の要素なくしては有り得べきものでない。されば此種の宗教は一個の世界的宗教と名づくべきである。

二 特殊の宗教

以上述べたるが如き人間を高めて精神生活の獨立の支持者たらしむるとを宣する世界的宗教は未だ全く最後の結論を持來したとは云はれぬ、歴史的宗教の重要事項に就ては論ぜられない、又實に一體宗教なるものが何故に他の生活に對して特別の範圍となり、且つ歴史的の形を構成するとを得たかといふとは少

しも説かれてゐないのである。彼の歴史的宗教の主なる心慮は即ち靈性の激勵といふとにあらずして、實に人間の精神及び人間生活の全體を堪ふべからざる反對から救ひ、罪惡と苦痛から解脱せしめ、而して有ゆる方面から彼に迫り來る滅亡に反抗して精神の本性を維持するといふことであつた。此目的を追求して行けば宗教は當然他の生活から離れて新しい團體を造るべきである。吾人が是迄觀察し來りたる所により、果して今かゝる轉回の可能なることを知ることが出來やうか。抑も亦救済に對する渴望の起るや否や、又其渴望の満足さるゝ道が開かれるや否やを知ることが出來やうか。吾人は此二の疑問は確かに肯定され得べきものだと思ふ。

先づ第一に獨立の精神生活を人間の範圍内に顯はすことは世界の觀察及び人間の生活状態を單純にする所以のものにあらずして、寧ろ之を益々複雑ならしめることは明かなる事實である。何となればかの轉回は經驗に一致せざる、否、

全く之に反對する現實に對する要求を含んで居るからである。精神生活が一切の現實の核心又力であり、而してそが人間に取りて元始的生の本源となるとすれば、假令卑しい荆棘から取圍まれてゐても、精神生活は其高さを安全に維持し、而してそは一切の外物から惑はされずして唯其固有の道を踏んで行き、從つて又人間もかゝる高擧に由りて一切の下級なる精神的のものに反抗して一の安全なる地位を有することは全く確かでなければならぬ。嘗て反對と思はれたものは平凡の状態が遙かに後になること、精神生活の要求に對する拒絶に外ならぬ。けれどもそれは精神生活をして其固有の運動を妨げ其目的に遠かり、且つ自ら分裂を來さしめることは出来ぬであらう。

併しながら此妨げは實際に於ては常に精神生活の外の境界にのみ存するにあらず、其内部に迄も這入つて來て、之を掻き亂さうとするまでに至つて居ることは、總ての經驗の公平なる觀察の示す所である。そこで精神生活は到底其

獨立を維持することを得ずして他の勢力に従屬するやうに見ゆる。吾人は先づ第一に吾人の周圍の自然が唯精神生活の目的に對して全く冷淡であり、且其建設破壊共に精神生活に及ぼす影響などに就ては毫も頓着せないことに認めざるを得ぬばかりでなく、寧ろ自然の方から云へば、自ら十分に精神生活を支配し、自分の方から之を律して、一寸と見ると肉體の組織が精神生活の高さを定め、而して遺傳の事實は人間をして全く闇黒なる自然の連鎖に従はせてゐることを明瞭に示して居るのだ。人間は其努力行動に於ても亦自然を遙かに超越したやうであつても猶ほ依然としてその奴隸たるを免れぬ。肉情は文明に由りて自然の偽りなき状態から淫蕩なる文弱の状態に化せられ、又斯る轉回に由りて精神的努力をも自分の方へ引下して了つた。人間の共同的生存はたゞに精神生活の目的に對して無關係無頓着であるばかりでなく、却つてそは精神的の力を捕へて、強ひて己れの趣味に従はせやうとして居る。しかし個人に在りては恰かも

靈性の生長が自然的自己保存を限りなき利己主義まで高めて行つて、廣大なる全世界を自己の幸福の爲めの單なる方便及び造具として取扱ふやうにして了つた。總て斯る損害は結局人間の範圍内に於ける精神生活の內的薄弱を露はして居るのであるまいか、生の統一はこゝでは十分個々の力を維持し、且之を互に相融合せしむるに足らぬ。そこで個々の力は根柢から分離して、各勝手な道を取り、互に烈しく相反對し、又全體の目的にも反對するやうになり、終に全く滅亡して了ふことは到底避くべからざることである。多くの部分的文明 (Theilku-
lter) は互に相反對し人間全體を特別の方向に引付け、多少の力を發達せしめ他の者をして之れが爲に死滅せしめ、容易に精神の全體及び内部に對して危険を來たらしめるのである。かくて科學は理性的冷靜、智的高慢、心の偏狹を産み出すものとなり、藝術は虚榮と柔弱との源泉となるのである。精神の自己の運動が吾人に在りて斯くの如く精神に反對しつゝ、あるのは、如何にも自家撞着のや

うに思はれる。此一個の事實は端なくも吾人をして『神より外何者も神に反對するものなし』(nemo contra deum nisi deus ipse) てふ中世紀の注意すべき言に思ひ當らしめる。然り此矛盾は實に善の否定、敵視、破壊を喜ぶ心を高め且つ惡魔のやうな害を喜ぶ心を高めるのである。假令人間の自然の深淵は全く不可解なものであつても、敢て平易な開明の道がない譯でもない。しかし吾人は其闇黒を脱しやうとれば唯だ其れを眼を閉ちて見ぬ振をするだけではゆかぬ。

吾人はしかし彼の分裂殊に惡の實相を説明することを得ぬ、夫故、一切の神學者及び哲學者の勞力は全く失敗に歸した。さりとて吾人は又それを樂天主義で説明し去るとも猶更ら出來ぬ。唯それは世界に關する吾人の關係を純然一個の觀照のそれと會得せしことだけは成功したやうに見ゆる。何となれば單なる觀察に對しては事物は多くの骨折なしに一個の平凡な一致が出て來るやうに互に相近寄つて來るからである。しかし吾人は實際世界に對し、且つ自己に對して單

なる観察者の關係を有して居らぬ、吾人は實に世界の中に起るものを感じ且の經驗する。夫故吾人は猶ほ彼の宥和を以て満足することが出来ぬのである。

しかし反對は猶ほ烈しいとしても、それは吾人に於ける精神生活の發顯の根本事實を取消して了はない、寧ろ自らそれを豫想せしめて居る。若し何物も損害し且つ壓倒すべきものがないとすれば損害轉倒は全く不可能であらう。善がなければ一の惡も亦考へられぬ道理である。げに危險そのものも一層大なる深さの意識を起すことを得、罪の中に於ても道德的法則の權威の確實なると認め又懷疑の中に於ても眞理の成立の確實なることを知ることが出来る。しかし此考は吾人を矢張反對の眞中に置き、吾人の生活及び努力に全く静止の状態が迫まつ來つゝあるのだ。若し新しい生活が最後まで貫徹されぬとすれば、それが發顯したとて實際何の役にも立たぬ。それは吾人が與へられた状態では到底解くとの出来ぬ問題を吾人に提出するのみならば唯吾人をして煩累と壓迫とを感せ

しめるのみではないか。

若し反對の多い状態の上に自己を高めることが出来て、又それを超越した一層廣い精神生活が開發せられるならば、生は兎も角も力と信仰だけは維持することが出来る、此可能はしかし内部に向けられて、一個の獨立を發展した宗教の代表する所のものだ。何となればかゝる宗教は、精神及び人類の、常に世界を浸潤するのみならず又世界を超越した神に對する直接の關係がかの危害や毀傷の達するとの出来ぬ一個の新たなる精神生活を發顯するとを主張するからである。人間の一切の活動はこゝでは神の夫れから支へられ高められて居るのだ。夫故に一切の危害が及ばぬのである。色々の宗教は此關係の一層精密な構成に於ては甚だ區々である。しかしそれが救濟的宗教となる所には、此所に起されたる深さは元來精神に内在し、而して其後に始めて神と關係を結ぶに至つたのではなく、寧ろそれは先づ神との關係から起つて、絶えずそれから支へらればなら

ぬといふことは疑はれない。斯る深さは全く獨りでは成立たない、彼の根抵の確かな存在と結付いて、又其方に向つて行くことに依て成立つのである。そこでは或る古いものが高められるのではなく、寧ろ新しいものが創造されるのである。

然しかゝる新しい生活の起源、發達の證明となるべきものは此の生活の實際の發達より外にない、かゝる證明は一切の單なる勞作、よしそれが最も高いものであつても、それを全く超越した精神状態の發顯によつて與へられ、而してそれは全體に於て一切の文明殊に精神的文明にすら反對して一個の純粹な世界を超越した獨立自存の人類に適はしいのである。もし人間は其勞作に優れりといふことが正しいとするならば、人類生活が文明の單なる建設に優るといふことも亦正しくなければならぬ。何となれば此文明がそれを確かめて居る獨立自存から離れて自ら最後の目的となり、而して人間を其の單なる従僕、又道具とし

て了らうならば、それは實に仕方のないものだ。文明はかの獨立自存から離るゝと共に人間の精神を奪ひ去つて了らう所の破壊的勢力となるではあるまいか。而して一切の其騒然たる勞作は自己の經驗とならぬ以上は結局詰らない空虚なもので終るだらう。しかしながら若し勞作を超越した生活が成立つてそれを支ゆるならば、その時こそ勞作は個人に在りても亦同じく自己の經驗となり得るのである。斯る生活はたゞ一切の現實の世界をば超越せる源泉に對する直接の關係から起つて來るのである。

精神生活の全體は一切の反對に拘らず維持せねばならぬ任務を有して居る。しかし精神生活は有ゆる反對に勝たうとすれば、是非ともそれを超越し、それに對して安全に固められなければならぬ。斯の如き高擧は今生活の全體に亘つて起つて居らぬ、唯或る特別の方面、即ち勞作の範圍に對して一個の新たる深さを形成することに由て起るのである。これしかし乍から精神状態との分離を

生ぜしむる。此分離は勞作なるものを決して利用しないで、其れを以て生の終局の目的とすることを許さぬのである。しかし此の精神状態も亦其の固有の問題と運動とを有して居る。こは人間の生活は茲には神の夫れと關係してゐるとしても、それから全く吸収されて了ひもせず、又之の獨立のない路に引下げられて了ひもせずして、寧ろこゝには一個の創造的勢力の活力に由りて、凡て眞正の精神生活に内在する獨立發生の奇跡が顯はれるからである。彼の精神的深さも亦此の如く、轉向若くば反對、確立若くば分離の能力を有する。神のものは唯自己の決定と採用とに由りて全く人間の所有に歸するのである。併しこれは精神に於ける種々な事柄を問はずして、其全體を問ふのであるからして、此問題は他の多くの問題に超ぐれて居つて、偶然に此等のものが衝突するやうなことがあつても、それは無條件の超越性を有して居る。此所に發展したる人と、世界を超越せる靈性との關係は全然精神生活の範圍に屬するものなるが故に、こゝに

一個の純粹なる内心が發顯するのである。此内心中にありては精神と精神生活の全體との關係は恰かも我と汝との關係の如き親密なるものであるからして、この内心は一切の精神的勞作に於けるよりも遙かに大なる熱と親しさを有つて居る。夫故に若し人格的のものゝの觀念が或る凡ての觀念と言語とを絶したものの記號象徴であるといふことが明かに意識の中にあるならば一個の一層人格的な特質を得るであらうと云ふことが出來やう。此所に人間が内心の最も深い點に達して居るといふことは、人間の相互の一致と、内的共同生活とが有ゆる時代に於て最も多く宗教に由りて齎らされたといふ事實が之を明かに證據立てゝ居る。宗教は吾人が此所に觀察したやうな意味に於て人間を遠くに引離したといふよりも、寧ろ人間を互に密接に結付けたのである。そこで感情と確信との結合を要求する生活範圍、乃ち藝術の如きは宗教なくしては築えて行けぬことも自づと明瞭になつて來る。

特別の意味に於ける總ての宗教は苦痛と罪惡との解脱の渴望から出て居るが故に、是等のものゝ征服を完成し、又それと同時に生活を一の大なる運動に變せしめねばならぬ。此運動は乃ち吾人をして苦痛の上に超絶せしむるものである。がしかし苦痛なるものにも、吾人がそれを感ずるといふことが既に生活を頑固な怠慢から覺醒せしめ、精神の中に憧憬の念を起し、而してそれと同時に新なる生活に高める準備を爲すといふ意味に於て一個の價値を與へることが出来る。若し眞正の靈性が全く發顯すると共に吾人の生活が單なる自然の過程から離れて、自己の行爲と變化するならば、此の行爲の特質は、最も大なる動搖を経て其本質の高上を完成し、且つ新なる生活を捉ふるが故に、當然高まつて行くのである。此運動と又其中に在る決定とが擴張され、ばさるゝ程、生活は獨立の歴史を得、且つ自から精神の歴史をも得るのである。大なる宗教は多くは唯萬有なるものを一個の歴史的觀察の下に置けるのみならず、多くの運動を以て人間

の歴史の精神となり、現實が一個の機械的な自然の過程に變化しやうとするのに反抗して働くのである。自由殊に生の根柢に於ける自由は宗教とは互に切つても切れぬ關係を有つて居る。

しかし此轉回は生活を一層容易く且つ愉快にするとは云はれない、何となればそれは非常に重大な世界的難問を人間の精神の上に置き、且つ一切の苦痛を自分のものとして共に感じ、それが爲に一層苦痛の感じを高め、又過失をば全く惠深き神聖の意思に反對せるものなりといふ刻印を打つが故に、過失の嚴さを高め、それと同時に是迄可なりに満足されて居つた多くのもの、例之ば一般に行はるゝ道の如きは不充分なものとするのである。しかしこの總ての中にある標準の高上は同時に生活の高擧であつて、假令其運動の中に多くのものは出來上らずにあり、又他のものは曖昧になつて居つても、人間に於ても又人類其物に於ても一切の變り易い考を超絶し、一切の懷疑を超絶した或物が起り、而して

吾人の生が大なる内的連絡の中にあつて、決して詰らぬものでないといふことはどうしても疑ふことは出来ぬのである。

同時に吾人は宗教の根柢をば主として人間の上に据える點に到達する。唯かゝる宗教のみ能く人間の精神的自己保存に對する慾求、又人間が自から經驗し且つ行ふ所のもの、絶對無限の價値に對する渴望を満足させるのである。先づ第一に吾人が個人個人のとなして考へて見ても、自然は彼を全く冷淡に生活の一時的な通過點として取扱ひ、運命は一旦は彼を利用するが又忽ちにして棄て、了らう、人間の周圍は實に或る一定の價値を彼に與ふるのであるが、それは眞の束間だけで、又忽ちにして消え失せるものである。何人と雖もそれは恢復するとの出来ぬものであるとは吾人が屢々之を耳にもし又自ら之を實驗する。而して總の生活の經驗は諦めの律法を力を強めて説教して居るではないか。併し乍ら吾人の中には此決定に對してそれは全く疲勞老衰せるものとして反抗し、否此

決定を一の内的破壊として排斥する所の或物がある。何となれば吾人が茲に謂ふ所の壓迫は單に自己保存の本能でない、況んや變遷流轉を経て唯自己の快樂のみを救はんとする小我に従屬するでもない、寧ろこゝでは此特別な地位に於ける精神生活の保存發展てふとが問題なのだ。吾人が萬有建設の協働の爲に召出されたものとして果して此任務を成就しやうとするか、又それを成就し得るや否やが問題なのだ。此所でも又人間の中に彼自身に反對して自己を主張し、且つ彼を其意思に反對して捕へ、而して竟には彼の意思をも征服して了つて、彼の意志を自分の意の儘に支配すべき或物が起つて來る。此所には唯吾人自身にのみ關係せざる、従つて吾人がそれを斷念することを得ざる或物が維持されねばならぬ。何となればそれは吾人に任せられた善の放棄であり、又吾人に責任ある事業を見棄てることであるからである。其中に威嚴を逞ましうしてゐる生活の壓迫は有形的のものに對して形而上學的のものと云ひ得べきであらう。若し

かゝる生活の壓迫が消え失せて了らなければ吾人が行ひ、且つ吾人の中より造り出す總てのものはどうでもよいことゝならねばならぬ、そこに吾人に尊敬すべきものが残つて居らぬ。然らば吾人は抑も何物に由りて支持せられ、何物によりて高められるであらう。吾人の生活は虚偽假相となり、又すべて吾人の企畫する所のことは全く無意義になるであらう。しかし彼の一層高い生活の壓迫が吾人の中に働らいて居らぬとすれば、吾人は果してどれほど一個の活潑且つ熱心なる慾求に達したであらうか。もしどこかにそれがあれば、其所に慾求は既に一個の所有たるを示し居る。そこでバスケル(Bachel)の『爾若し我れを見出さざらば、必ず我を尋ねざるべし』てふ言の全く正かつたことが分る。

しかし唯新しい生の深さを開發して、そこに安全なる基礎を据えてゐる宗教のみ能くかゝる生活の壓迫を認め且つそれに安ずることが出来る。かゝる精神的自己保存に對する彼の拒むべからざる渴望即ち精神生活の維持に對する渴望

は必然的に宗教への轉向を取るのであつて、是れ即ちアウグスティンが『我神よ、我れ爾を求むるは乃ち幸福なる生活を求むる所以にして、我れ爾を求むるは乃ち我精神の生きさんが爲の也』と言へるに一致するのである。

此難問は先づ第一に個々の精神に關係して居るのであるが、又人類全體に無關係するのである。蓋はこゝにも亦一切の勞力勞作が文明の機關の中に消えて行つて全く無意義に失敗するか否や、又それに反對して一個の精神的自我を得、それと共に無限なる勞作の意義が生ずるや否やの問題か起るからである。

斯の精神的自己保存の難問は即ち宗教が殊に人類を強いて自分の方へ向け又引付けつゝある最終の所である。何となれば此所は生の元始的根源であり、又そこには根本定理があるからである。而して其の否定若くは肯定に由りて精神生活が吾人の中に立つか或ひは倒れるかゞ定まるのである。しかし此肯定は全

體の轉回と自然並に文明を超越したる世界の中に位置を占めることゝがなければ生じて來ぬ。これは更らに益々衝突を起し反對を見出すであらう。しかし之れに負けるならば、生活は一種の分解に陥つて、結局破壊されて了はねばならぬ。これは人間の到底長く堪へ得べきでない。精神的自己保存の必要は絶えず思を宗教に瀉くであらう、而して否定すらも終には必ず肯定に至る道となるのである。吾人は茲に明白に言ふことか出来る、即ち、最も危険なる點は實際に於ては最も確實なり、一切の他のものゝ確實はみな之れに懸れる也と。

宗教は是迄全現實と思はれてゐた者の上に思ひ切つて高められることによりて始めて一個の安全な歸着點を見出すのだ。それと同様に宗教に固有なる生活も亦唯獨立に於てのみ、否、彼の現實に反對することによりて發展することが出来る。それと共に生活の全體は獨特なる外觀を呈するやうになる。勿論宗教は唯世界を超越するばかりでない、又再び世界に歸つて來て宗教によりて代

表された生活を其中に活かして行かうとするのである。しかしながら内的征服と同時に、反對は無なくらないで、それは時代の經過に於て愈々益々大なる力を得て來ることは明かな事實である。そこに又戦争がある、而して人間が其立場に於て此戦争に果して全く勝てるかどうか分らない。そこが生活は其事業を完全に仕遂げることゝに於てよりも寧ろ戦争と經驗とを経て自から新なる深さに進んで行き、一層多く自分自身の中から造り出し、敵に對しては一層力と團結とを示すに於て其利得を求めなければならぬ。夫れ故、歴史の進歩は決して人類てふ地盤の上には永遠の國を築き上げぬであらうが、しかしそれは人間の領分内に靈性の力と内容とを益々増し加へ、それに由りて吾人の生活を高めるであらう。しかし此世界永久の不完全及び人生不斷の戰鬪の征服は宗教をして必然的に此世界の全體の上に超越せしめ且つ世界其物並に一層廣い連絡の中に自己の意義を見出さしめるのである。生はそれと共に吾人が到底追求するとの出來ない

程の一層大なる連鎖の一節となり、又人間の方では最後の成行を見届けることの出来ぬやうな超史的の劇の一齣となるのである。多くの宗教の空想は色々な書を斯る生活の道程から描き出すであらうが、しかし生に對しては全くどうでもよい事で、生に取つて最も肝心なことは、宗教が果して能く其發達によりて周圍の世界を超越して、其の主なる經驗を自己の中に有する意識、即ち彼の世界の標準に檢束せられずして寧ろそれを自分の方から律する意識を懐くことが出来るやうになることである。是れ宗教に取つては自己の中に十分確實に固有の特質を發展するのに缺くべからざるものである。かゝる宗教は生を彼岸に對する希望や期待として了はないで、それを現實の最後の深さたるべき、世界と時間とを超越した獨立自存の秩序の中に置くのである。此所では運動が近い所から遠方に及んで行かずして寧ろ表面から深さに及んで行くのである、否それはかゝる深さ其物の探求に過ぎぬ。一個の安全且つ確實に根柢を据えた世界に對

して何か新らしいものが唯思想に由りて附け加へられるのではない、寧ろ茲では評價の仕方が轉倒するのだ、即ち始めに見た時には安全に見えたものが、生活の益々進歩すると共に非常に動搖し出して一個の根柢の確かな支持の必要を痛切に感ずるやうになる。しかしそれは宗教に行かねば到底見出されない。

此轉向は必要なことには相違ないが、しかし又吾人を人間の能力及人間の理會力の最後の限界に導いて行くことは疑ふべからざることである。此事は實に觀念に於てのみならず、又感情の中に於ても、生活全體に於ても行はれるのである。此所では人間は容易に支持を失つた、内容のないものの中に達し、益々先へ攀ち登りつゝ、而も連絡から離れて、結局總てのことに於て迷ふやうになる。特に單なる個人に於ける宗教的運動は何等の深い痕迹を遺さず又殆んど本能の仁核に觸れない刹那の無限の膨脹、一時的の閃きに過ぎぬのだ。斯る危険に反抗して必然、深奥な所から涌き出で、來る生活を捕へて總てのものに近づけ、又

一種獨特な精神的大氣を以てその深さを包んで、個人の全く當にならない一時的な境遇や氣分に一個の確固なる基礎を與へる宗教的生活範圍を形造る必要が痛切に感ぜられるのである。此の宗教的本能、根本情緒を靜かな又效果ある勞作に導いて行くのには宗教的團體即ち教會への轉向は全く缺くべからざることである。しかし此團體への轉向は同時に又歴史への轉向を意味する。何となれば人間は決して普遍的主義や理想に於て互に結合せられずして、寧ろ歴史的の出來事及び經驗に於て結合されるからである。それと共に生は宗教の爲に一個の明白なる具體、同時に又個性を得るであらう、新しい疑問と危険とは實にそこから起つて來る。と云ふのは具體は得て精神を害し、又之を推し退け、個性は宗教生活の根本内容と衝突し、又個人は社會的周圍の勢力によりて壓迫せられ、活きた刹那は過去に從屬するによりて之に壓迫せられるからである。今日吾人が殊に感ずる此紛糾に就て吾人は後に猶詳しく論じなければならぬ。しか

しそれは如何に動搖し又いかに人心を不安ならしめたにしても宗教的團體を形造る必要だけは疑問に附する譯にはゆかぬ。特殊的宗教はかゝる宗教的團體なくしては到底維持することは出來ぬ。しかし教會を無くてもよいものとするのには個人個人の眞理の慾及び精神的能力を非常に尊重するか、否らざれば宗教的團體の稀薄になり行くに任かして置かねばならない。若し夫れ今日向上心ある人々が教會なるものを殊に一個の壓迫障礙として感ずるとせんか、一體それは決して教會の本質に於ては、寧ろ現代の教會が世界史的の要求に適應せず、又內的に全く老衰したといふことに於てある。しかしかゝる經驗は教會の排斥を強ゆるものでなくて、却つて其の革新を痛切に感せしめる。

三 回顧と綜括

宗教に關する吾人の觀察はたゞ其平面を通過せずして、實に吾人は先づ精神生活に於ける出發點を確かにした後、更らに進んで宗教の内部に於ける二個の

階段を経て来た、二の階段とは即ち普遍的宗教の階段と特殊の宗教の階段とである。宗教なるものは是迄は唯精神生活全體を確かにし且つ深めるだけの作用を有してゐたのであるが、吾人は此特殊の宗教の階段に於て始めて、それが自己の思想界の形成及び獨立に關し、且つ自己の生活範圍の創造に達することを認めめた。しかし此階段は、假令猶ほ普遍的宗教に進んで行く必要があるにしても、決して單なる通過點たることを許さぬ、實に又宗教的生活の根本的要素でなければならぬ。もし特殊の宗教が唯自己の範圍内にのみ限られて居るならば、竟いに生の全體との接觸を失はざるを得ぬ。その時には其はたゞに狹隘且つ排他的になるばかりでなく、寧ろかゝる狹隘をも實に『悪い』世界よりの分離として喜ぶのである。是はしかしながら遂に内心の頑硬、乃至僧侶的傲慢、敬虔主義乃至バリサイ主義に到る道である。しかしかゝる狹隘は自から禍を招くやうなものだ。宗教が斯くの如く狹隘にせられることは、やがてそれが當に他の生活に

對して有力なる作用を失ふのみならず、遂に自ら分解して全く主觀的感情の波の暴れ狂ふ所となり、それと同時にかゝる宗教の全體を單なる人間の妄想と説明せんとする、又いつの時代にもある懷疑と戰ふ能力を失つて了うのだ。夫故に如何に發展して行つても決して連絡を失つてはならぬ。而して宗教が常に健全且つ有力ならんが爲には、生の一層廣い全體の内部に留まらなければならぬ。特殊の宗教は普遍的宗教を通じて其働を生の有ゆる分枝に伸ばして行かねばならぬ。此二つのものは絶えず相互に働いて、以て宗教の生活は、自己の中に一個の運動を有し、且つそれが特色のあるうちにも廣さを失はず、又廣さのあるうちにも特色を失はぬやうにせぬばならぬのである。

斯の如く先づ精神生活より世界的宗教へ、而して普遍的宗教より特殊の宗教へと上つて行くことは、一體各個人が宗教に關與し且之を確實にせんが爲、獨立に此運動を通過せねばならぬものと解すべきではない。もしさうすれば宗

教は實に凡ての人及び人類全體の爲であるべきのに唯小なる群れの事件即ち精神的貴族主義となるばかりでなく、又一切の元始的生を拒絶する所のもの、媒介によりて宗教は單なる附加物のやうに見ゆるであらう。しかし實際に於ては全く之れと異なり、矢張此所に於ても亦宗教は凡ての精神生活を一貫して居る同じ経験を最も明瞭に爲しつゝあることは確かなる事實である。即ち人間が或物に向つて努力したやうな仕方は勞作の導いて行く經驗に就て決定を與へない。又吾人の爲に多くの制限と媒介とに結付けられたるものは、明かに顯はれ來るときに直接吾人に對つて働き、元始的の力を發展することが出来る。若し斯ういふ事がなければ個人個人の諸の教育も、又吾人が多くの勞力を爲しつゝある人類の有ゆる文明も、畢竟一個の人工的附加物に過ぎず、又是等のものは決して眞に吾人自己の生活とならぬ。さらば生活はまた歴史と同じやうに益々古くなつて老衰して行くばかりであらう。生の過程は竟ひに其形成には缺くべ

からざるものであつた殻皮を脱ぎ棄て、而して勞作の有ゆる紛糾は敢て他の證明を要しない文明の元始的經驗の元氣から遠ざかりつゝある。何となれば結局生其物のみ生の眞理を證明することを得るからである、こゝにも亦一の轉向が完成される、即ち眞の原始は道の始めにあるのでなく反つて其の終りにあるといふことである。しかしそこには又眞の確信力がある。精神生活が吾人の達したやうな種類のものから解脱することは有ゆる生活範圍に於て完成されるが、殊に宗教に於てはそれが最も強く且つ根本的に行はれて居る。何となれば此のことは其發達について見れば最も多くの豫約を有し、従つて最も多く懷疑や否定に免れしめるからである。此高さに達するならば宗教は最も單純なる又最も原始的のものであり且つ最も直接明瞭に精神的自己保存、心靈の救濟を約束し得る所のものである。

然し宗教はかゝる確實に於て同時に自由と個人的決心の事件となつて來る。

こゝにも亦精神的活動の他の範圍と十分なる一致を保つべきである。凡てかゝる範圍は人間を機械的壓迫を以て捕へない、寧ろ其目的の爲めの運動の中へ自ら這入つて來ることを要求して居るのである。唯かくして其經驗に與からしめ、且つ生活の富に向つ眼を開かしめ、唯かして其確信力を得せしめることが出来る。しかし考が其意思及び働作に對して閉ざされてある所には、そは單なる妄想と思はれねばならぬ。若し真理の目的全體が精神を冷靜にして居るならば、思想家の科學的真理を得んとし、藝術家が藝術的真理を得んとする努力は如何にも馬鹿げて見えるであらう。而して同時に真理に向つての努力に由りて得たるものは全く解し難くなり、淺薄なる理解若くは苛酷なる嘲弄に由り凡てのものに反抗するのである。宗教にありては此難問はたゞ特別なる方面に向つて生の發展することのみに關係せずしてむしろ生の全體に關係するが故に一層大いなのだ。されば此所には凡てのものは殊に生の發展が確實且つ痛切にさるゝやう

に自ら運動の中へ這入つて行かねばならぬ。此運動の中に這入ることは何人に對しても強ゆべきものではないが、しかしそれを拒めば生の全體は精神を失ひ、而して唯思想の不十分なることは得て彼の人間生活の全體を浸潤して居つて、宗教に於て明かなる表顯を得る所の峻烈なる撰擇力を闡ますことは到底免れることは出来ぬ。しかし思想界に對しては現實の洞察は遂に生活状態の高さに適合しないといふことが残つて居る。されば確信の真理の爲めの戦争も亦第一に生の高さの爲めの戦争である。

下編 問題の解答

準備的考察

吾人は是より方向を轉回して一個の歴史的事實としての基督教に就て吾人の觀察を進めて行かうと思ふ。先づ第一に考へねばならぬことは、是迄の觀察に由りて吾人はかゝる歴史的事實に對して如何なる地位を得たかといふのである。それには是非とも基督教が他の諸宗教に對して如何なる關係を有するか、又基督教の色々な形相互の關係を明かにせねばならぬ。吾人が是迄に得來りたる確信は歴史の有ゆる功蹟に對して一定の限界線を引いて、其限界の内部に於てそれに尠なからざる意義を加へるのである。かゝる制限と意義とは互に一種特有なる取扱ひ方を産み出し、且つ大なる難問を開展するのである。

先づ第一に吾人の研究は宗教なるものが人間の本性の共通の經驗たることを

示した。實に精神的自己保存に對する渴望は凡の人間に共通である、又各人をしてかゝる自己保存に至らしめる所の新生の發顯も亦吾人凡てのものに共通でなければならぬ。人類の範圍内に於ける真正なる靈性の發展は凡て此の轉回に係するものとすれば、彼の高上の轉回から人間を引離すのは、取りも直さず人間を精神的世界から墮落させるやうなものだ。夫故に或る特別の宗教、例之ば基督教の如き宗教が有ゆる他の宗教を排斥し拒絶して唯一なる宗教即ち唯獨り真正なる宗教であるといふ要求は斷じて斥けなければならぬ。この主張がどんなに極端なものであるかを感ずるが爲には此主義を徹底的に十分に考へて見ればよい。他の諸宗教と雖も亦神の生命が其中に働らいて、又そが人間をして自己を超越せしめつゝあるといふ確信を以て人間を生死せしめて居るのだ。しかし神の實證が唯かの一の宗教にのみ限られてあるとすれば、かゝる信仰は大なる迷ひであり、又神の默示と思はれたものは全く虚偽なものとなつて了はねばならぬ

道理だ。人間が全然一個の範圍に屬して居つて、其範圍以外のものは總て一括して拒絶した間は實際さう考へたのである。それは中世紀の行方であつたが、しかし近代の行方はそんな風ではゆかぬ。何となれば近代は其水平線を無限に擴げて行つて、人間發達の凡ての廣さに對して好んで思を潜めしめ、吾人の眼前に他の多くの宗教の形を顯はし、又是等のもの、中に多くの真正なる努力、多くの勞作及び献身を顯はして居り、有ゆる差別の中にも人間の根本經驗と根本問題との一致を示して居るからである。此の凡てのものを全然棄て、了つて、それを唯目的に背いたものとし、唯迷妄、虚偽、迷信と見做すのは絶對に不可能である。しかし此所では曖昧な考へ方でない限りは妥協する譯にゆかぬ。乃ち彼の諸宗教の中に神のものが働らいて居らぬとすれば、それは或非神的、反神のもの乃至神のものを、他位を無理に篡奪した者であつたのだ。然らば此等の宗教に於ける一切の事は大なる偶像崇拜であり、又かゝる宗教は真正の宗

教と謂ふことを得ぬ。斯る確信を以て吾人は如何にして古典的古代の上に吾人の教育の基礎を置くことが出来やう。それは最も深い根柢に於て空虚迷妄に陥るやうに見ゆる。しかしかのアシルス(Aschylus)やピンダル(Pindar)プラトリーやプロチンの一代の傑作を詳しく知る者は是等の人人には深い信仰の無いものと斷じ且つ彼等は偶像崇拜者なりと大膽に誹るであらうか。斯くの如く基督教の段階にありても亦恰も指導的の人人は基督教が歴史的存在範圍を超えて宇宙的のものに擴がつて行くことを熱心に考へたのだ。オリゲネス(Origenes)の如き東洋教會の最も偉大なる思想家は、彼の好んで凡てのものに勝れる神(ὁ θεὸς πάντων θεῶν)と呼んで居るその神の愛は凡ての國民、凡ての時代を包括し、而して之れなくしては人間の中に何等の善事の行はれぬものと思つて居つた。實に彼は神のものを世界の中に認むる基督教に於て恩寵の最高顯現を見た、しかしそれは彼に取りて全人類を一貫して居るもの、頂點を形作つて居るのだ。西

洋的基督教の最大の人物たるアウグスチン(Augustinus)は斯ういふことを謂つた。即ち、『今基督教と名づけられて居るものは古へにもあつた、而してそれは實に基督自身が肉體的に(in carne)顯れる以前、既に人類の創造以來あつたのだ。既に業に存在して居つた宗教は其時から基督教と名づけられたのである』と、かゝる確信を有して居るものには基督教は一個の制限ある歴史のもの以上の意義を有する筈だ。若しさうであるならば、宗教的生活の種々雜多のものをば包括する宗教といふ思想は大に進んで來たものと云はねばならぬ。假令哲學的觀察が宗教なるものをば一個の人類全體に共通の事件として取扱ひ、而してある特別の範圍にそれを制限することを堪え難き自黨心として排するにしても、基督教は到底一個の迷ひであるといふことを得ぬのである。

しかし乍ら他の一面には宗教が歴史的の形體を取ることによりて獨立の現實となり、而して生活を浸潤せる勢力を得たのであるといふ事實を認めざるを得

ぬ。吾人がかゝる努力を新なる世界を超越せる生の發顯として確信することは、やがてそれに對して十分の理解を得る所以である。もし宗教が神及び人の事に關した教義の起草であり、人間の生存が超越性から光耀さるゝことであるとするならば、精神的運動は主に觀念から生へ進んで行くのであつて、生から觀念へ進んで行くのではない。然らば少なくとも吾人が教義の根本に於ては互に相一致し、而して共同的に贏ち得たるものを到る處に成就するやうに努めねばならぬのである。しかし事實は全く之れと異つて居る。宗教には偉大なる力を以て吾人を捉へ、且つ舊の状態の上に吾人を高めて新なる高さに至らしめる生の獲得が必要である。それには大なる覺醒が起らねばならぬ。即ち舊いものが全く打破されて了つて、元始的な生の源泉が發顯せねばならぬのである。宗教はかゝる勢力と作用とを唯だ全く特別なる事情の下に、即ち偉大なる人格の元始的經驗となつた一個の威力が生活と努力とをして他の事物に對する有ゆ

る勞苦と、思考の有ゆる動搖とを超越せしむる所の個々の頂點に於てのみ得ることが出来るやうに思はれる。唯かゝる精神的且神的生命の發顯する所に於てのみ數千年間人心を温め得たる火は燃え上つた、唯茲にのみ比類なき生活の統一は起つた。是れ即ち種々雜多のものに一個の共通なる特質を與へ、同時に一種特有なる典型を造り、それによりて起されたる目的と共に人間の努力を時代の長い鏈に由りて固く結合し得たるものである。斯の如き宗教的生活の發展及び個性化から遠ざかるものは果して能く虚無に陥らぬであらうか。

若しもかゝる唯一の個性化があつたとすれば、問題は極めて單純であつて、既に決定されたものと見做すことが出来やう。しかし個性化は唯一でないその多くのものがあり、そして其の一が正しければ又他のものも正しくなければならぬのである。吾人はかゝる宗教の多數の中に立つて唯單純に吾人が偶然に生れた處の宗教を真正のものと聲明し且つ熱心に之を辯護すべきであらうか。若し夫

れルッソー (Rousseau) の言を借りて云ふならば信仰はそもく地理の問題となり、而して人間はメツカに生れずしてローマに生れたとに對して報賞を受くべきであらうか。吾人は明かなる意識に覺醒せる思索的動物を大觀し、比較し、測量するより外のことは出来ぬであらうか。吾人がもし、それに對して一の標準を求めらば、それは宗教の難問全體に對する特別なる宗教の功蹟より外のものではない、即ちかゝる個性化は吾人に取りて最も貴いものでなければならぬ。吾人は最も廣い範圍に於ける宗教の生活全體を取入れて、最も大なる力を以て一般的輪廓の上にそれを高めるやうなものに結合せんと勉めるであらう、又吾人は宗教を最も多く個人及び人類に對して完全なる現實に高めるやうなものに結合せんとするのである。基督教と雖も亦實に此標準に基づいた試験を免れることを得ぬ。

多くの宗教の中に在つて基督教の有する地位の難問に加ふるに更らに基督教

の個々の形相互の關係の難問がある。是迄に既に多くの形が起つた而して其各のものは基督教の眞理及び基督教徒の生命を所有せりと主張するのであつて、此は前に各宗教の間にあつたと同じやうな紛糾を生せしめるのである。各個の信條なるものは、もしそが最良のもの、否基督教の眞理の唯一の正當なる代表者にして、他は悉く取るに足らぬ間違つたものであるといふ確信がなかつたならば、十分に人心の歸依を得、又十分に行爲を供することを得なかつたであらう。しかし斯ういふ思想に全く捉はれるならば、そこから實に堪ふべからざる頑迷な心が起つて來る、即ち羅馬カトリック教には大いに其傾向がある。何となればそこには他の信條は皆眞理の正當なる競争者と考へられずして、寧ろ眞理の贗造者、違法の篡奪者、又出來得るだけ撲滅すべき敵と考へられるからである。箇様な頑迷を厭ふ人は、一層廣い意味の基督教の眞理、及び基督教の生命を信條的形の上に高め、それと同時に一層親しい相互の關係を造出すことを必要

とするであらう。しかし愈々此事を實行して、色々の教會を基督教全體の運動の單なる外形若くば個性化と見做すといふと、一方には、抑々此運動は彼の多くの外形の中に無くなつたのではないか、又近代の世界史的推移の結果として、既存の形に矛盾撞着を來して新しい形の出顯を痛切に感ずるではないかといふ疑問が當然起つて來る。これは近代の傾向であつて、吾人はその勢力の侮るべからざるものであることを確信する。

そこで吾人は今日尙ほ基督教徒たり得るかてふ問題は自然二の問題に分れる。即ちそれは曾て、現に基督教の中に在る如き宗教的創造は其根本的内容と共に近代の有ゆる攻撃や反對に拘らず宗教的生活の超絶せる高さとして維持されるべきか、或ひは必然來るべき變遷は其力と其真理とを弱さずして反つて益々之を強めんとするや否やてふことの説明を意味したのである。しかし更らに一の問題が起つて居る、それは基督教が目下取つて居る多くの形が最近數世紀の

運動及び經驗の中より新たに勃興しつゝある生の眞理内容を自分の中に取入れ得るや否や、又基督教的生活の完全なる力と働との爲の憂慮が其上に出でんとする努力に由りて驅逐されぬであらうかてふことである。

此問題を論ずるに當つて是迄の研究は多少吾人の足場となる。即ち吾人は基督の特有なる意思はどこであるかを確證し、且つ近代は如何なる疑問と攻撃とを以て基督教に對抗しつゝあるかを認めたる。而して吾人は又近代が如何に偉大なるもの永久的のものを贏ち得たりとするも攻撃すべからざるものに於ける此最後の問題に對しては猶ほ不完全であり且つ進歩の中途にあることを認めたるのである。若し近代が斯の如く自ら完全なりと爲しつゝある所にも猶ほ大いに攻撃すべものありとせば、そは生活を破壊し、扁平にすることを免れぬのである。斯くの如き多くの運動の撞着は吾人をして難問を時代の特別なる状態から引離して獨立に熟考すべきこととするを餘儀なくせしめたのである。そこで宗教は

吾人に取りて高い價値を得たが、しかし此評價がどれ程歴史的存在に及んで居るかは全く未決の問題である、又それと同時に之に對する吾人の態度も未だ決定して居らぬ。若此凡てのことが如何に熟考し試験して見ても猶ほありとすれば、それは吾人の主觀的の考や評價にあらずして寧ろ共同的生活の推移及び世界史的運動に依りて之に最後の決定を下すことを努めねばならぬ。而して此推移は人間の狀態氣分、竝に精神生活の有様を變化せしむる所のものである。唯かゝる支柱に支へられて斯のやうな企てに伴ひ來る所のは多くの危險に反抗することが出来る。

吾人は是から先づ基督教の特色を殊によく顯はした個々の要點を捉へ、更らに進んで此地位の維持に對する基督教の要求及び其全體の地位を大觀的に吟味して見やうと思ふ。

第一章 基督教存在の理由と革新の能力

一、基督教は闇黒の時代に於て人類に支持と慰藉とを齎した。げに基督教は最初の生活狀態を根柢から顛覆して、以て神の上に建設され、神より充實されたる生を有てる宗教てふとを統率的要件となし、而して其れを出發點として有ゆる生活を構成したのであつた。此努力を漸々先へ進めて行て中世紀に於て一個の總てを包括する宗教的文明組織といふものが出來、それが現代にまでも及んでゐるのだ。しかし近代の特徴なるものは愈々大なる力を以て生のかゝる解釋制限に反對した。世界は人間に對して一層の價値を得、益々強く人間をば自分の方へ引付け、同時に一層彼を活動といふものに招致し、一層多くの發見且つ發展すべきものを與へ、彼をして其中に十分の満足を見出さしめたのである。しかし由來斯ういふ風であつてすら周圍の世界は人間に取つて親密な故郷のや

うにはなることが出来なかつた、又彼をして其中に幸福を感じしめなかつたのである。人間には超世界といふものが消え失せてしまはず、神のものは單に世界を深めたもの、世界に随伴したものと成つて、遂には全然蒸發してなくなつてしまふやうのことはなかつた。而してそれと同時に單なる宗教的生活系及びそれが一切の人間の事物を支配することに對する反對が起つて來た。他の生活範圍は漸々勝を占めて、屢々烈しい戦争があつたが、遂に獨立を得た、而して唯かゝる獨立を以て斷えず宗教へなびいて行つたり、又羨ましさうにして眺めたりせず此生活範圍は其中に内在せる真理内容を忠實に且つ純粹に發展し得たやうに思はれる。かゝる努力は得て單に銳利なる批判のみならず又進取的活動の能力としての一切の人間に共通なる理性に關係するのだ。斯る理性の中にこそ凡ての個々の範圍を包括し、之に生氣を與へる所の宇宙的文明 (Universal-kultur) はあつたのだ。舊い宗教的組織は此所よりして堪ふべからざる偏狹なもの

となり又個人に對しても單に宗教的なる生活の構成は餘りに狹隘なものとなつてしまつた。

是は各人が受くべき變化であつて、各人皆その努力を世界史的運動の狀態に適應させねばならぬ。これは單なる個人個人のみならず又人類生活の變化である、殊に主觀的狀態のみならず又勞作の仁核の變化である。しかしながら此變化は果して最後の結論を持來すや否や、又そは寧ろ更らに新たなる紛糾を産出するにあらずやと疑問は當然起つ來る。さういふ紛糾は確かに起つて來る。一層の活動は周圍に發展してそれが益々高い價值を與へた、而かも吾人自身の吟味する所によれば此活動なるものが精神の根柢を充すことの甚だ少なく、且つ愈々益々勢力を増加せんする不斷の急ぎが生活をば遂に全く空虚なものにしつゝあることを示して居るのである。現代の活動の膨脹は必然的に二の疑問と二の要求とを喚起する。それは活動が人類全體の獎勵とならんが爲には精神的

活動てふものに高められなければならぬ、さういふ活動こそ、もし時代を超越した真理の中に安んずることに由り、且つ精神の平和に由りて其平衡を得さへすれば、内心の不安と無意義な氣のいらちを征服することが出来る。しかしかゝる深めることゝ補足とは活動に一切の能力を有する世界活動を興へないのみか、むしろ其上に高めしめ且つ同時に宗教へ轉向せしめるのである。是れ即ち今日の状態をして舊い基督教のそれから差別せしめる所のものだ、彼の疲勞困憊せる時代は出來得る限り一切の自己の活動を中止せんことを求め、且つ生活の波風を避くる港ととして、活動に對して安靜を求めたのである。而してかゝる安靜は唯神の中に見出された。『爾は我等を爾のものとして造り給ふ、されば我心爾の中に休むまでは不安なり』。(アウグスチン)しかし吾人近代人は大なる生活の壓迫に充されて居り、而かも吾人は活動の進歩の中にありて生活の歡喜と希望とを見出しつゝある。どうして活動を棄て、寂靜の休みに吾人をうち任せる

ことが出來やう。されば若し神的东西のものが吾人に顯はれるとすれば、それは活動に反對してゐなくてはならず、寧ろ其内部に於てそれを深め高め且つそれに精神を入れることによりて顯はれて來ねばならない。然らば神的东西のものは活動の獨立自存てふことよりも「層現實的に發顯せぬのであらう。

其獨立自存の發展は宗教的生活に不變の典型を興へ、宗教の一層能動的ならんことを望むのであつて、かゝる宗教に於ては神的东西のものと人的のものが最早互に相反對せず、随つて神を正しく崇拜せんとするものが人間を卑しいものと考へるやうなとなく、寧ろ之を高めて神の造り給へるものと會得するやうになる。又自由と恩寵とがもはや互に相反對しない、却つて同一の出來事の相關的の側面を形造り、力の感じと敬虔の念とは互に相排斥せずして、却つて互に相勵まして進んで行くのである。それと同時に彼の吾人を卑しくし且つ奴隸のやうにする昔の所謂敬虔の念に對して一層勇ましき、一層正しき、一層快濶な生活の

構成が成立つた。かゝる一層大なる能動性は決して基督教の精神に衝突しない。何となれば、もし其心配が苦痛の方に向つて行き、行爲の上に向つて行かなかつたならば、さらばそれは時代の特別な状態から大部分解脱したからである。加之ならず苦痛は唯ぼんやりと堪え忍ぶだけでなく、其中からして愈々益々進んで已まない活動が見出される。實にかゝる活動からして新しい生活が發展してくるのである。勿論苦痛と抑壓其物には何等の價值はないが、それに由りて生じて來た生の深さは大に價值あるものだ。其範圍に於て「苦痛は活動の絶頂なり」(Passio summa actio) といふ言は起つたのだ。歴史の経過は往々此活動の特徴を暗ましめたりやうでも、又再び明かにそれを發揮して來た。此所に宗教改革は大なる部分を形造つて居る、何となればそれは一切の盲從的歸依を棄て、精神をば殊に其自己の經驗の上に据えたといふことに於て先づ其本質を顯はして居るからである。今やしかしながら吾人は更らに宗教改革の地位以上に進んで行かねばなら

ぬ、蓋は此者は殊にルツテルの考へに由れば能動性なるものを餘りに精神の内部にのみ限つて、惡しき世界を其自己の成行き若くは神の攝理にうち任かせるからである。吾人近代人はそれに反して周圍世界の中に神的事物のものが力強く顯れて、それが十分に世界を浸潤して居るとを主張するからである。そこで活動の内的高擧、及び一層男らしい生活の構成は基督教生活の特徴の破壊を意味せずして、むしろ一の發達を意味することが確かになつて來る。

同時に吾人の世界に對する地位は自づから變つて來る。吾人は既に近代が如何に神的事物のものと世界との一層親密なる接觸を渴望し、且つ如何にそをこの世界の彼方にも其内部にも求めたるかを認めた。生活のこの特色は現代の精神生活に於ける汎神論の勢力と内在てふ言の多くの人心に及ぼす魅力ある響とを明かに示して居る。世界は恰かも吾人に取つて一層意義あるものとなり、而してそれは一層連絡と美と生とを開發して來た、それ故吾人は世界が悪いものである

といふ酷い非難は最早思ふとを得ぬ。しかし吾人は又、世界の此生長はそれに固き基礎を與へ而かもそれに超越せる精神生活の働に由つて始めて出來たのだ。げに此精神生活こそ世界を形造り其中に再び自己を顯はすのである。されば世界と神とを混交した汎神論は唯實相の誤れる説明としか思はれない近代に於て勃興した神がこの世の中に一層強く働いて居るといふ思想は決して神が世界てふものゝ中に消え失せて行くといふ意味でない、神の觀念には世界を超越するといふことが緊要である、この世が現實の全體であるならば神を容れる餘地がない。だからして汎神論は極力排斥しなければならぬ。そは動搖せる中間物として大なる難問を曖昧にし、同時に生活の精力を著しく弱めるのである。汎神論は内部の不十分でふことに惱むで居るのだ。其は世界が經驗せしめつゝある事物の單なる駢列以上のものを欲し、且つ其の一切の單なる唯物論よりの分離を宣言して居る、がしかし此事物の源なる駢列以上のものに獨立を與へ、其上

に自分の基礎を据えるところを躊躇するのだ、だからして小心で保守的で影のやうなもので敢て事物の状態を全く變化することも出來ねば、又生活に些かも責任を負はせるとも出來ぬのだ。それは辛じて自己の不完全の表面の装ひをする位が關の山だ。十九世紀の經驗に依れば純然たる理性の國としての現實の汎神論の説明は殆んど承認するとは出來ぬ。なぜならば自然はもはや吾人に取つて昔の時代の様に精神に充ちた調和や幸福な平和の神として顯はれず、むしろ不斷の生存競争の劇場として、將た不可解なる機動として顯はれて來るからである。人類とても亦烈しい政治的社會的戰爭の中にありて以前の浪漫的の醇化を失ひ、而して今日行はるゝ所謂人格の讚美、其偉大な品位等も亦恰かも人間の微小と利己とを強く感せしむる時代に於ては、もしそが一層大なる深さから固められないならば、全くうつろな誤り易い辭句となつてしまふ、それは實に有神論と汎神論の分れる所だ、しかし有神論は一層異つた種類のものでなければならぬ、

此所では無論近代の勞作と經驗とが一個の新しい種類のものに向つて努力するとを吾人に強いて居るのである。しかしかの二者の孰れを擇ぶかてふ問題は未だそれに由て取り去られもせねば、又些かも其意味を弱められもせぬのである。

汎神論が世界觀に於て—實は偏したる或ひは誤れる—言ひ顯はせる人間に對する現實の現代的推移は生活の勞作にまでも及んで、此所に一層大なる紛糾を喚起しつゝある。世界の内部に於ける吾人の任務は絶えず大きくなつて、益々吾人の力を要求しつゝあるのに、神的东西を人間の生活に對する超越の中にも又それに對する關係の中にも尋ねないことを吾人は期望して居るのだ、特別に宗教的のものは人間の範圍内に於ける活動に由りて吾人に衰へて了つた。『人間の中に神を求めざるべからず』てムノワールリス(Novallis)の言はさういふ風に解すれば現代の考へ方の信條とも謂ふべきものだ。しかし此所も亦直ちに人的のものを其單なる經驗状態に於て一層大なる深さに對する凡ての關係なくして讚

美し且つ行爲の目的とする誤りが生じて來る。現代を横流して居る社會的文明の運動なるものも亦た其通りで、それが唯精神的にして、同時に又宗教的なる生活と連絡を保つときのみに正しく且つ價值あるものとなるのだ。若しそれから全く離れて、自ら全體とならうとするならば、直ちに邪道に踏み迷つて了う。何となればかゝる轉回に際しては人間の幸福快樂といふことより外に目的はなく、而して之れは生活を軟弱なるものと爲し、且つエピキュラス主義(Epikureismus)に導くことは到底避くべからざることであつて、大多數が既に自分から内的高擧を成就して、量がその儘質に變はる謬見、即ち吾人の時代の印象と經驗とが否定する所の謬見に陥るのだ。プラトンは嘗て國家よりも高いものを知る人になければ國家を能く統御することは出來ないと云つたが、それと同様に人類よりも以上のものを知る者でなければ眞に人類を獎勵することは出來ぬと云はれやう。それ故に近代が宗教の實證を殊に人間に對する働作の中に求めやうとし

て居るのは大に理由のあることだ。近代は單なる人類以上に高めるもの棄て、一切の文明を單なる人間に變化させるものとすれば、全體は全く平凡化した了はねばならぬ、そして社會的文明はたゞに宗教に對してのみならず、又一切の眞正なる精神的文明に對して烈しい衝突を來すのである。夫故に生活の勞作に於ても亦内在に對する運動が其存在の權利を維持し、而してこれと同時に人間に先づ一個の價値を與ふる神的のもの、超越性が十分に保存せられて居るといふことは非常に大事なことである。

もう一つの要點は生の全體に於ける宗教の地位てふことであつた。近代の發展は單なる宗教的生活組織の狹隘を打破つた、そして他の範圍に獨立を與へた。此範圍が獨立を得て、益々宗教を推退け、往々其固有の地位をも奪去らんとした。しかし生が此轉向に由りて財と運動とを贏ち得たが、それと共に又多くの紛糾が顯はれて來て、此所で最後の結論を下すことを中止するのである。科學

的、工藝的、經濟的等の如き所謂部分的文明はそれ／＼異つた道筋を取つて自から生をして分裂しめ、又人間を彼方此方に引張り廻はすのである。若し總體的文明への高上が出来て、人間が全體として自己の中に一の任務を有するならば、そこに始めて人間は多くの反對を超越することが出来やう。吾人の精神生活の觀察は實際さうであることを示した、しかし夫と同時に此所にも大なる難問が起つて來て、それを解決するのには初めの状態を顛倒して、それと共に宗教へ轉向せねばならぬことをも示して居る。その助けがなければ生の全體は逆も維持する譯にゆかない、又集注は膨脹に對抗するに堪えぬ。

かくて宗教は依然として現代人に對しても亦生活の根本的要素である。而し其地位は昔よりも大に變つてゐるとは固より云ふまでもない。乃ち宗教は今や一個の包括的生の全體の内部にあつて此全體に生々とした精神を與ふべき重大の任務を有して居るのだけでも、宗教はそれから分離して直接に他の範圍を

支配し若くば自ら特殊の圏内に閉ぢ籠つて、それに對して特別なる神聖を要求してはならない、彼は寧ろカトリック教の方面に行はれ、此は教會的プロテスタント教の方面に行はれて居る。先づ第一のものに對して注意すべきことは宗教は勿論有ゆる生活範圍の上に權威を有たなければならぬが、それが壓迫的の重荷や障礙とならぬやうにするのには、どうしても間接的なものでなければならぬ、即ち生の全體に由つて媒介されねばならぬ。宗教が他の生活範圍殊に科學の到達すべき目的を躊躇せずと興へるとすれば、他の生活範圍、殊に科學は甚だ詰らぬものと考へねばならない。個々の生活範圍に自由の發展を許してある以上は、無論多くの紛糾、誤謬は到底免れない、しかし若し生の超越的全體さへあるならば、そこからして有ゆる紛糾や誤謬と戦ふことが出来る。かゝる自由の運動からして宗教に大なる危機が迫まつて來たからと云つて、若し宗教の獨立性と元始的經驗とを認めるならば、毫も懼るゝに足らぬのである。實際宗教が

吾人の確信するが如くさういふ原始的經驗を有するとせば、全く安んじて戰鬥に臨んだが可い。しかし根柢に於てかゝる戰鬥に逡巡躊躇して、危険のない、即ち外見上危険のない平穩を冀ふ所の不信仰がありはせぬか。

吾人が大に戦ふべきことは宗教の混淆といふことよりも寧ろ其孤立といふことである。かゝる孤立の結果として二重の不都合が起つて來る。即ち宗教其物に對しては、そが生きた根本との連絡を失つて、其上頑固に且つ形式的になるといふ危険があり、又人間に對しては、彼が狭い範圍以外にある總てのものとの關係を斷ち、而して其の制限の中に全く一個の特別の功蹟を認めるといふの危険があるのだ。徹頭徹尾生活を一個の特別なる範圍からして構成することは、むしろそれを引下げて萎縮させる所以のものであつて、竟に其眞理を危くするばかりである。此事は藝術や科學に對しても言へるが、宗教に對しても亦無論言へるのだ。宗教が彼の孤立を可いこと、考へて、神の名を口に唱へるといふこと

は、決してそれが宗教の地位を安全にする所以のものでない。

吾人は既に世界史的狀態が生に構成に於て別な宗教の地位を要求して居ることを認めた。しかしながら若し宗教が最早昔の儘では人心を支配することが出来ぬとしても、敢て他のものと同時に或る別なものになるのではない、又宗教が外に向つて多くの戦ふべきものがあるからとて、それで自己の獨立が危くなりはせない。而して此所で常に新しいものが渴望さるゝからとて、それが敢て基督教との衝突を意味する譯ではない。此所で問題になつて居る難問は宗教と生活との關係であつて、それは古い永遠のものである。基督教の内部に於てそれを解釋する色々な形が試みられた、今日と雖も亦種々の解釋が相並んで居るのだ。しかし更らに進んで解釋を試みたからと云つて、敢て全體から脱するといふ譯でもあるまい。吾人は基督教固有の趣味に於て自由な解釋を取ることが要求するのである。

二 基督教は精神的宗教である。基督教は總ての高い宗教と精神生活の超越性の共通的根本思想を特別な力を以て争つた。又基督教は倫理的行爲を確かに一切の本能以上に高めた。其の天地創造の思想によれば自然なるものは全く靈から創まつて居るのであるが、自然の發展に於ても亦基督教は靈の力と智慧とを認めて居るのである。近代は今や之れに對して大いに反抗しつゝある。自然はたゞに大なる獨立を得て、其固有の權利を要求して居るのみならず、又其要求を以て再び精神生活に對つて行つて竟に自ら主なる世界となつて、一切の靈的のものは單なる附屬物、否自然其物の産物と見做すやうになつたのだ。此に於て乎、一切の精神生活は此の人間に於ける單なる顯象に過ぎないやうになる、其時には靈からして世界を説明し、又それを靈の目的に従はせるといふことは飛でもない神人同形説 (Anthropomorphismus) となるのだ。かゝる變化と共に一個の宗教の可能は全く消えて了つた。

是は危険な攻撃であつたが、しかし此靈性に對する攻撃よりも更らに一層危険なものは基督教に特有なる精神生活の範圍に對する攻撃であつた。何故に危険であるかと云へば、それは内部からして、精神生活其物の中に起つたからである。現代の文明勞作に對しては精神的内心、及び人格と人との關係の觀念を有する此精神生活の範圍は餘りに狭小である、又餘りに人間の幸福の慾望乃ち全く人間的のものごとくつ付いてしまつて、それから離れて萬有を統率することが出来なくなつた。それ故現代的の考へ方に依れば眞正の精神生活は唯彼の人間の個人的範圍以上に擴張することに於てのみ達し得べきものと思はれて居る。現代は其努力の主なる頂點に於て彼の精神生活の人間の個人的範圍に反對して居るのだ。例之ばスピノザやヘーゲルの如きはさうである。即ちこゝでは思想は一個の獨立の性質と一個の超越的力とを人間に對して發展し、且つ自ら宇宙的偉大を顯はすやうに見える。範圍の廣い多くの思想の集團が起つて、各

一個の内容を示し自ら運動の力を與ふるのである。そは人間に従はずして、むしろ其反對に人間を征服して、其能力を己れの目的の爲めに利用するのである。例之は今日は全體の努力に其方向を指示し、且つ個人個人をば卓絶せる力を以て結合しつゝある社會的理想等に關してかく言つて居るのである。精神生活の個人的着色は同時に個人的一般的のものに遠ざかる、事物は其必要を以て到處に決定を與へねばならぬ。生活は一切の人格的のものを其要求の下に従屬せしめて始めて自己の高さに到達するものが出来るのだ。それと同時に精神生活からして描き出された世界の觀念は自づから非個人的のものに推遣られず、又神の人格の觀念も最も鋭い反對を見出すのみならず、生活も亦其の根本に於て革新せられて、一個の行爲からむしろ一個の出來事過程とならねばならぬ。その際熱と精神的内心とを失ふのは到底避くべからざることではあるが、しかし其代りに廣さと力と一般的眞理を得るからして遙かに平均を保つやうに思はれる。今日

と雖も矢張此通りであつて、彼の内部からも外部からも起つて來る一切の反動に對して基督教の個人的形成を如何にして是認し且つ主張することが出来るかてふことが問題となつて居るのだ。

第一こゝに言ふべきことは、基督教の主なる努力が始めから人間をば其儘幸福にすることに向けられたのでなく、むしろ先づ人間から新しいものを造つて、始めて其新しい人間に眞の幸福と平和と救済とを約束したのである。基督教はつまり人間をば單なる人間として評價せずして倫理的秩序の一員として評價するので。吾人は又倫理的難問をも論せねばならぬのであるが、此所では乃ち基督教其物が普通の意味に於ける生活の單に倫理的の構成に多くの反動を有するといふことを注意して置く。若し基督教が神のものとの人的のものとの根本的一致を宣傳せず、同時に一切の道德的格言を推退けて、更らに形而上學のものに一步を進めることが出来なかつたならば、果して能く斷然猶太教から分れ

ることが出来たであらうか。此所かして基督教の經過全體を通じて二の思潮が保存された、即ち一は倫理的のものであつて他は冥想的のものがある。之れは管に色々な思想界や色々な神の觀念を産み出したばかりでなく、又生活の色々なる種類をも産み出したのである。倫理的のものは一切の罪からの解脱と、神との個人的關係を渴望した、そして正しい考から支へられた行爲は生活の高さを意味するのだ。冥想的のものは之に反して周圍の存在の變遷流轉乃至分裂から永遠の統一に通れて行つて一切の現實の本源との根本的一致に由りて言ひ知れぬ幸福と世界を超越せる平安とを得やうとするのだ。茲では生活の絶頂は倫理的行爲を以てゝなくて、寧ろ人間を漸次神に近づかしめる神秘的冥想である。彼所では神は神聖にして慈悲なる人格であるが此所では之に反して絶對的な、凡て人間の思想勞作を超越したる實在者である。之は人格てふ觀念と雖も能く之を把握することが出来ない。彼の倫理的構成は教會的生活に於て殊に優勢を占めて

居り、冥想的のものは神秘教に於て其形を爲して居る。しかしこれは生氣を與へる背景として遙かに特別な範圍を越えて基督教的生活の全體に及んで居る。殊に希臘並に羅馬カトリックは二の形を共に維持して、それを互に働かした。教會的プロテスタントが神秘教を取つたといふことは、必ずしも超ぐれたことゝ思はれない。しかしかの二のものが生活を廣くする爲に多少役立つたとはいひながら、既に歴史的意義が覺醒されて、生活構成の特殊のものに對する觀察が鋭くされた以上は、二重の神の觀念、二重の生活、即ち個人的及び非個人的生活を有して居る傳來の儘では到底成立つことは出來ない。二元の征服の努力は宛かも基督教其物の中にある任務と一致するのだ。かゝる努力は人間の生存が有する特別の性質を凡て包括することに由りて生じて來る精神生活の觀念があつて始めて可能となるのである。

人間の生活及び努力は結局決して暖いが、しかし狹隘且つ陰鬱な個人的のものと、廣いがしかし冷かにして精神のない非個人的のものとの反對に別れて居らぬ。吾人の觀察の示す所に由れば、一切の精神的活動は凡ての反對を征服し、且つ凡ての客觀的のものを外部に放棄して置かないで、自己の中に引入れ、それに由りて生氣を與へ、又精神生活は同時に主觀的側面をも發展せしめて、他のものと共に新なる生活に結合するのである。その結果主觀客觀の兩側面をば分裂の上に高めて再び統一に至らしめる。しかし此統一は反對を其儘にして置かずして、それを包擁し結合する所のものである。夫故に人間の個人的及び非個人的の形の争ひを突破して精神的個人的のものに達するやうに努めねばならぬ。これ實に精神的特色を發揮し、倫理的運動と冥想的運動とを互に相一致せしめんとし、人間生活のともすれば現代に行はるが如く空虚なる主觀態と精神なき勞作とに分裂せんとするに反抗する所のものである。吾人は現代が基督教と同じ目的即ち包括的超越的生活統一に向つて進行しつゝあることを認めた。しか

し吾人が此統一てふ言に對してどうかして記號を附することを個人的に回轉したいといふのは、必ずしも單なる其言を喜ぶが爲めではない、それを斷念するとは敢いて難かしくない、唯これを斷念しないのは其言の裏面にあるものゝ爲めである。ライブニッツやカントの如き思想家は精神生活の超越を立證するに大なる關係を有して居る、かういふ人人には何人と雖も拙劣な神人同形説の責を負はせる譯にゆくまい、要するに精神的なものが浪漫主義のやうに闇黒な夢のやうな束縛された事象とせられずして、むしろ能動性として、又神的事物が獨立の生活として會得され承認され、而して自由の行爲が單なる過程以上のものとなればそれでよい。凡て此事はしかし最後の世界の根柢が非人格的のものとして表示され取扱はれるならば、危険に陥るか否らざれば甚だ曖昧なものとなる。吾人は人間の生活から得來つた觀念が不十分であるからして、これまでも往々行はれ、而して今日猶ほ多く行はれつゝあるが如く、人間以下のもの

に再び落ちて行かないやうに注意せねばならぬ。

げに一個の新なる超越的統一に對する欲求は吾人の生の構成の上に重大な要求を有つて居る。殊に宗教は其際著しい變化を受けねばならぬ。そは遙かに直接の精神状態の背後に退いて、之を一層大なる精神的深さの表顯と爲し、主觀的刺戟の代りに一層精神的實質を發展し、且つ概念に於ても亦遙かに大いに遠慮をし、人間が神に關して言ふ凡てのものゝ象徴的の性質をば一層強く言はねばならぬ。しかしながら歴史は明かに力の充ちた宗教的生活は一切の人間の觀念の不十分だといふ明かなる意識に一致して居ることを示して居るのである。プロチンは先づ至高者に關する一切の人間の言ひ顯はしは單なる比譬であるといふことを明瞭に言つた。他の偉大なる思想家が基督教の立場に立つても彼のやうに爾かく眞實に且つ力強く宗教の根本的經驗を感得することは難かからう。

吾人は精神生活の中に實に現實の新なる階段を認め、其中に萬有の全體は其深さを人間に發顯して、彼をして共に働かしめるのだ。それが人間の中に起つて來て自己の行爲となつたならば人間は一個の世界の所有を自覺し、そして其所に於て精神生活を維持して、以て彼の生活の精神を得、一切の主觀的刺戟や一切の利己的な幸福の慾望を遙かに超越した一個の高い任務を見出すのだ。

斯くの如く内部からして一個の世界が吾人に顯はれて、同時に吾人の生活が世界的特徴を帯びて來れば、吾人は自然の進行に對し又其靈性の征服に對して有効なる反抗を爲すことが出来る。吾人は今や實に外から吾人に這入つて來る世界に此新なる世界を對立させることが出来る、それと同時に又自然に遙かに多くの意義を與へなければならぬ。自然が近代に於て一層大なる獨立を得て其能力を測るべからざる功蹟に由て現はしたことは、これやがて自然が吾人の生活の中にも大なる重要なる、任務を遂行すべき權利を與ふる所以のものであり、

又舊い基督教の爲せしが如く、自然の大なる國を精神生活に間接に結合し、直接それに從屬させることを禦ぐのである。

此事は官能的奇蹟の問題に於て明かになつて來る。勿論官能的奇蹟の否定は歴史的基督教の成立を危くするものである。基督教は必要なるものを決して否定してはならぬ。此所では色々な思想が一緒になつて互に相強めるのである。吾人が今日自然顯象の同形なるとに關して、ついに是迄よりも少しく不確實に考へて居るからといつて、敢て奇蹟の傳ふるが如き自然の運行の破壊に對する疑惑を弱めはしない、少なくとも世界組織全體に反對するやうな奇蹟は唯無條件に確かに信せられ一切の懷疑を免れなければならぬ。しかし吾人は今日其事の如何にも覺束ないことを知つて居る、又一方にはともすれば一切の經驗を飛び越へて、周圍に於ける大膽な幻像に對してすら甚だ激しい信仰を見出しつゝある宗教的空想の行はるゝことを知つて居る。

宗教は自然から観れば一個の内的奇蹟である、生活の新しい種類及び現實の新しい階段の發顯である。又精神生活の獨立である、此獨立はしかし吾人の研究全體の指導的思想又主なる結果であつた。それ故に吾人は此所にそれを主張せねばならぬ。かゝる獨立が其自己の内容と力とに由りて顯されたならば此生活が人間に於て常に自然の條件の下に發展しつゝあり、又人間は結局自然てふものと最も密接に結合されて居るといふ事は些かも根本的疑問を起させない。それは兎に角、今日往々行はるゝか如き出來事の條件と其創造的根原とを一緒にして了ふ誤りに陥る。此所では習慣は何等の意味はない同一の誤を幾度も繰返すといふことで決して之を眞理に高める所以のものでない。

然し精神生活の獨立も亦比類なき特徴を以て懷疑の外に置かれたが、今や實に自然と精神との關係の大なる疑問が起つて來る。此所には唯二つの可能がある、曖昧な中保を好む者の考へる様に三の可能はない。自然は一切の現實の根本

を意味するか、然らば精神的のものは單なる附屬的顯象乃至附屬的結果に過ぎぬ、或ひは之に反して精神的のものが現實の核心を形造つて居るか、然らば自然は精神的のものゝ發展の一階段、若くは其發顯に過ぬのである。是れ二の可能であつて、第三のもの、即ち往々誤り稱せらるゝが如き自然と精神との完全なる一致説若くは完全なる並行説は絶對的に成立たない、それは恰かも一の物體に二の重心を與へることが出來ぬと同じ譯である。實際過去に於ても亦現在に於ても完全なる同一説を立てることは何處にも成功しなかつた、さういふものを發見するならば懸賞しても苦しくない。何となれば一のものが要點となれば、他のものは自づから明かになるからである。又今日自から一元論 (Monismus) と稱する所のものも決して反對の一致を齎らさない、むしろ全く自然の側面に立つて居つて、自然の觀念をばそが精神生活をも包擁するといふ所まで擴張し得ると信じ、それによつて精神生活に於ける固有にして且つ價值あるものを失ふこと

を認めない、それは殊に精神的な生活なるものを唯個人個人に於ける顯象の總計と理解して、そこに精神生活が世界史的な生活の中に産出し且つ新なる偉大と財とを顯はしたる偉大なる連絡のあることを全くを打忘れて居るのである。

吾人の研究は生活が靈性への轉向によりて單なる關係の世界から獨立自存への進歩を完成したことを示して居るが、それと共に精神的なものは現實の仁核となつたのだ。さらば其はこゝに根據を据え、而して最後の説明を自然から精神への方向に於てせずして、むしろ其反對に精神から自然への方向に於て試むるであらう。此精神的なものが後に吾人に出來てこゝに恰かも結論のやうに見えるものは此事實を少しも變ずるものではない、何となれば外部の地位に關係せずして、此最後の結論のやうに見ゆるものは唯前の章の續きを形造つて居るに過ぎぬか、或ひは少しは新なるものを持來すかどうかといふことに關係するからである、若しその新しいものが持來されて、而もそれが吾人の見たやうなも

のであるとすれば、終りは更らに新しい始めとなり、精神生活の獨立性と原始性とは毫も冒されず、發展の理想は最早凡て後のものは始めの力に頼よつて居るといふことを意味せずして、此運動に於て新なる高擧が完成される。しかしそれと共に後に顯はれてくるものは本來指導的勢力として此運動を支配するところが可能となる。結局凡てのものは精神生活の發現に由りて新なる根本經驗が完成さるゝや否やてふ簡單なる問題に到達する。若しその根本經驗が完成されば自然と精神生活との關係の中に残つて居る多くの謎は根本的確信を動搖させることは出來ない。しかし若し其反對に根本經驗が完成されなかつたならば如何に人間の偉大や品位などを語つても、又如何に新しい任務を人間から期待しても、それは全く馬鹿げたこととなる。

しかし吾人は又、精神を自由の上に置くことは世界觀にもあれ生活と勞作にもあれ決して自然を卑めるのでないことを斷乎として主張せねばならぬ。唯多

くの觀念を混雜せしめて單なる本能が樂に精神的偉大に變り得るものと信ずる、精神と自然との混合に對しては生活力の減少として極力反抗せねばならぬ。其完全なる發展の爲めには先づ判然たる分離を要する、さうすれば階段の各々のものは其の純粹なる特色を表はすのである。しかし精神の超越性を確かめた後には更らに自然へ歸つて行かねばならない。何となれば人間は自然なしには自己の完成を見出すことを得ず、又それを我物とせねば必須の生活力を發展せしむることを得ないからである。初めは單に官能的のものと思はれるものが如何に精神の土臺の上に移つて行つて、精神を獎勵し且つ生活を高める働を有して居るかは、藝術が其創作の多くを以て明かに示して居る。若し藝術が存在の永遠の調和に關するゲーテの言を最も喜ばしき確證を與ふるとすれば、同時に又、存在は如何に紛糾しやうとも精神と自然とは最後の根抵に於て互に相分離せずして、唯一の世界をば精神の統率の下に形造るといふ確信をも愈々強く

するのである。かゝる精神の統率と精神の宗教とは全く一致せねばならぬ。

三 現代的の考へ方が傳來の基督教と衝突する點にして救済の難問に於けるより甚しきはない。現代を浸潤しつゝある勢力の知覺は殆んど此思想を容れることが出来ない。勞作の團體に對する密接なる結合が吾人をかゝる有力に且つ生産的になし又吾人をして益々新なる高さに昇らしむるのに、吾人は何故に自己の能力に失望して他の助けを呼ばねばならぬのか、そも／＼又何故に毅然として立つ代りに自ら膝を屈し、而して男らしい勇氣に由つて自ら贏ち得たるものを恩寵の賜として請ひ求めねばならぬのか。此の如き氣分の變化は老衰したる時代と青年の元氣を以て奮闘努力しつゝある時代との大なる差異を明瞭に示すのであつて、唯猶ほ疑問となつてゐることはこれで此事件は落着いたのであるか、或ひは多少形を變へるが、しかし永久には無くならない一個の難問は時代の有ゆる推移に超越して残つて居るではないかてふことである。

勿論救済思想の昔の解釋に於ける多くのものは彼の疲勞困憊せる時代の色彩を帯びて居る、これは現代人が自己を偽らずしては我物とすることの出來ぬものである。先づ其昔の種類も亦峻嚴なる形と溫和なる形とを包括して居ることを忘れてはならない。若し峻嚴なる形が人間を全然廢類墮落せるものと見做し、敢て人の助力を待たずして一向超自然的の恩寵によりて人間に救済的轉向を與ふるものとすれば、同じものに就て殆んどさうは云へぬ筈だ。然れば生活は内部の連絡を失つて、切れぐなものになつて了ふ。又然らば決然たる轉向は人間を推付けて居る壓迫の除去、赦罪及び贖罪、將又生活の革新高擧と見做すことが出來やう。それは一種の慰安には相違ないが、しかし其慰安は力ではない。而して力が無い所には生活の進歩はない。

然し其中にある缺點は生活の事實に由りて大いに和らげられた。生活の事實は益々人間自力の働の餘地を見出した、否全然神の力に由りて支へられ導かれ

て居る。自己の微弱と不安定とより全く解放されたといふ自覺は往々にして最高の生活力を勃發せしめたことは歴史の明かに證明する所である。即ち改革されたる教會は其の豫定の教義を以て生活が反對を征服しても觀念の中に反對は残るべきことを示して居る。

救済思想の傳來の解釋は餘りに受動的な、そしてともすると餘りに擬人的にならうとする宗教の性質を含んで居る、神のものとの人的のものを餘りに反對の儘にして置く、否定と肯定とが容易にそれに勝さつて居る。又若しかゝる救済思想を眞面目に信ずるならば生活の勇氣を挫き、若しそれほどに眞面目に取られないで全く形式的に他人の口吻をまねるだけとするならば、それは内心の偽を産み出すの懼れがある。又例へば彼の敬虔主義者の考へ方に従つて小兒の心の中に罪惡の意識を起さんとするならば、それは小兒を心にもない不眞實に導く教育ではあるまいか。或ひはそは此奮闘努力の時代からして人間の微

弱と無價値との告白を要求して居るのではないか、自己の經驗を経て始めて確かにせられ、且つ生活勞作の結果として生じ來るべき確信と感じとを強ひて始めから生活の中に見出さんとし、始めに先づ人間に生活の勇氣と力とを喚起することをせずして、唯人間の力の限りあり又能力なきことを非難する、そこに救濟思想の根本的缺點がある。

しかしかく多くの危険あるに拘らず救濟思想の中に猶必要な眞理が残つてゐるかどうかは問題である。吾人は一切の眞正なる精神的生活は單なる點の事業を形造らず、個人並に人類全體の生活が精神的生活の紛糾に與れば與るほど、益々精神獲得の戰爭を形造り、其中に一層高い力の生々として現在せること、此力に支持せられ指導せらるることを示すことを眞理だと思ふ。それに達するのは單に強い自我意識によらずして、むしろ是迄の本能を棄て、新しい高さに高められねばならぬ。若し神的东西のものが或外物のやうに人間に注入されないで

自己本性の覺醒と理解されるならば、それは人間的のもの其能力及び其目的に對して大なる間隔否大なる反對が残つて居るのである。

かゝる確信は吾人の研究全體が之を保證するのであつて、近代の經驗によつて決して動搖されないのみか、却つて益々確められ、強められる。勿論近代は人類自身の能力から、又一切の連絡の拒絶の意識によりて廣い範圍に於て力を發展し且つ多くの功蹟を産出した。此意味に於て現代的な生活は新しい巨人の戰爭だ、人性と神性の反抗だ。しかし猶詳細に之を吟味して見ると、凡てこの能力はある特別の方向に向つて行つて、其中には内部の制限があり、その制限を踏越えれば不正に陥り、否若しそが最後のもの又全體にならうとすれば、生活を惡むべき墮落に至らしめるいふことが分る。げに人間は近來勞作の中に一層密接に結合した、しかし此結合は決して精神の一致、及び共同の思想界を持來さなかつた。表面は互に強く相頼つて居るやうであつて而かも内部は互に相分離

しつゝある。生活の條件と状態とは非常に複雑になつた、しかし富と活動と快樂とは益々増大するに拘らず、生活は獨立の内容と自己存在に於ける喜を見出さず、外部の富と内部の貧との對照は益々烈しく空虚を感せしめ、且つ益々不快を増加へるのである。生活の洪水は防ぐことの出来ぬほど漲ぎり動搖の度は益々迅速になつた。しかし此動搖に對して全く平均が取れて居ない、そして單なる連續をして一個の時代を包擁する現在に變化せしむべき超越的働作が起らない、又生活は一切の獨立自存を缺いて居るのである。さらば生活は一切の内部の連絡を失ひ、吾人は單なる刹那に懸り、單なる刹那の中に生き、且つ單なる刹那と共に亡び行くのである。是れ總て絶えず生活の精神的特質を破壊し吾人をして又一切の成功の中に在りて強ひて精神維持の爲めに戰鬥を爲さしむる所のものである。そは又同時に内心と永遠とより發し來る單なる勞作と時代の流れとを超越したる生に對する益々大なる渴望を産出した。かゝる渴望が強くなれ

ば、人類は其神性に迷を生じて來て、其中に働らいて居る生の方は彼をして彼の制限を打越えて生の愈々深い源泉を探らせるのである。それは人類が唯自己のみに満足するならば甚だ小さいものになることを示して居る。茲に於てか救濟思想の根柢に横はれる難問は更らに復た起つて來る。

四 基督教の凡ての論争は今や搖がすことの出來ぬ巖のやうな基督教的道德の事實に突當つて居る。吾人は倫理が基督教の中に有する特有の範圍並に主なる地位に對して近代が最も攻撃の鋒先を向けつゝあることを認めた。先づ第一に基督教的道德の非難されたる軟弱と溫和とに關して云ふならば、そが生活の倫理的必要全體を満すことを得ぬのは慥かに疑はれない。基督教的倫理はいつも其上に基督教の土臺を固めやうとしたのである、さうでなければ國家的秩序を維持することは不可能であつたらう、又さうでなければ破壊的勢力に反抗することも不可能であつたらう。しかしながら特別に基督教的倫理が全體となり

得ないからといって敢て基督教的倫理が詰らない無用のものだといふことを示して居らぬ、それが又生活を指導する要求に反対せぬのである。議論は單なる自然の過程に對して倫理的評價、即ち義と愛との反對てふことに關係して居る。義は勿論なくてはならぬものであるが、しかしそれが最後の終結を形造るものではないことは、古典的古代に於ける最高の發顯が之を示して居る、何となれば人間の取扱とその地位とを彼の功蹟に一致させやうとする其の根本思想は殊に強者及び幸福なる者の處世法であつて、こゝでは弱者に對しては運命の車は無頓着に廻つて行つて了ふからである。而して無限の愛とか、弱い者小さい者の救護とか、『吾人の下に居る者の尊敬』(ゲーテ)とかいふやうな道德はこゝでは行ふ餘地がない。吾人はこゝでは一個の組織全體の單なる關節に過ぎぬ、そして吾人の功蹟がこゝでは吾人の運命となつて、それはどうしても變更することは出來ない。基督教に於ては全く異つた生活の波濤が起つて居る。基督教が人の弱

點とその小とを其儘讚美したことを非難するのは甚しい誤解でなければ大なる平凡な考だ。何となれば基督教は外見上小さく又弱く見える者と雖も、能く内部の偉大を所有し得るとを確かめ、小なる者の中に偉大を發見し、それに由りて生活の一切の標準を一變したからである。又基督教は同時に大と小との間の一切の頑固な差別を取去つて了つた。何となればそれは最早人間と人間即ち有限なものとの有限なものとを比べないで、神的生命の無限と完全とを以て凡ての人間を度つたからして、人間一切の功蹟の不完全の共同の經驗の生ずると共に一切の差別は無くなつて了つたからである。かの差別は人間の目分量では非常に大きく見えても無限てふものに對するときには互に密接に相近づいて來る。若し一切の人間の迷ひや罪が神的生命の精神に於ける活動を妨げ得ぬとすれば、人間の概念に由て立てられたのでない、無限の愛は一切の人間の本性に發展して生活の内の高擧の有力なる刺戟となることが出来る。

かゝる生活の力は多くの尊い人人の苦痛と死に由りて根本的革命の下に生じたのだ、今や平凡な人々、否定の英雄等が来て、大なる叫聲を揚げて、彼等の自ら這入ることの出来なかつた、深さは元來無かつたのだと聲明して居る。彼等は如何に偉大なるものがこゝに人類に對して危険になつて居るか、又否定の結果として如何に重大なる損害と恐るべき退歩とが人類に迫つて来るかを少しも惟はない。吾人は義がなくても行けないが、さりとて又義だけでも行けない。

溫和と軟弱とが歴史的基础の上に往々正しくない位置に於て現はれて居るところとは既に争はれない事實である、しかしそれは必ずしも根本的に反對するといふ譯ではない。生活の全體は亦義をも認め、且つ義と愛とを正しい關係に持たさうとするのが、則ち吾人の主張である。されど義の實行の際に、一切の義が人間の手中に特別な人生觀、取も直さず一個の頗る難かしい人生觀を示すこと、又人間の生活がもし最後には義より愛に達しないとすれば甚だ頑硬に

して且は精神のないものになつて了ふことを決して曖昧にしてはならぬ。是れは常に一般の觀察が示して居るばかりでなく、又近代及び現代も之を要求して居る。そは人間の存在の不備、吾人の努力に於ける大なる矛盾の勢力、特別な強さに於ける吾人一切の能力の制限と無限の欲求との衝突を感せしめ、又自家撞着をしなければ生活の舊い結合とそれに適合した義の理想とを取入れ、且つ愛なるものを人間の運命の支配から脱せしめることが出来ぬからである。人道に對する現代の努力も愛の方向に向つて居る、吾人は多くの善いものをそれから受けた。しかしそれが若し基督教の開發した所の生の深さとの連絡を斷つならば表面的になり、分裂し、軟弱になることを到底防ぐことが出来ない。

しかし義と愛との難問は人間の考を打越えて生と勞作の實體に及んで居る。吾人は一切の精神的活動に於ては事物は主觀の目的や、氣分や、言説に對して獨立を得たことを認めた、そは此所には戦ふべき權利を有し、又其權利を嚴格に

主張せねばならぬ、人間の氣儘や弱きことの爲にそれから退却すべきでない。唯かゝる土臺の上のみ文明は生長し、且つ人類の精神的所有は形成さるゝのである。此意味に於て此所にも亦義は一切の成功の前提であり、此事の正常なることを認めて始めて人間は内的支持を見出し、又其行爲は安全なる針路を得るのである。

しかし吾人は人間と事物との分離と對立、即ち義の階段が如何に精神的活動に追ひ越され征服されたか、又それと共に事相は如何に獨立に發展しつゝある生活の中に入られらるゝか、精神と事物とがこゝに如何に有効なる相互作用、相互的高上に進み行くかを認めた。それと共に生活は吾人が愛の階段と名づける階段に高まつた。然らば此所には一切のよそ／＼しいとは驅逐されて了つて内的統一の確實と共に自由と喜悅とは得られるのである。唯此の如き愛の階段にのみ一切の利己主義を剿滅して、同時に積極的な生活の情緒、生活の肯定が

産出される、實際推理や諦めに由つて利己主義を根本的に征服するとは難かしい、それには須らく新なる生を呼吸することを要する。かくて愛の基督教的理想はまた文明の理想をも含むことを暗示して居る。此所に要求さるゝ生の高上てふことは彼の生活の調子を下げて寂靜な冥想に遊び、久遠の實在に没入する底の驚くに足るべき東洋的處生法とは全く別な遙かに力強い、又遙かに有効なる生活典型である。然らば愛は實にただに耐え忍ぶ愛たるのみならず、又第一に創造的の愛でなければならぬ。

近代の強き進行は獨り道德の特別な基督教的解釋に反對したばかりでなく、又主として道德の指導的地位にも、然り又、獨立の意義の凡ての承認にも反對したのである。道德は遙かに他の目的に對する單なる方便、別種の顯象の附屬顯象のやうに見えた。彼は自然が一切の世界概念及び生活の全體を支配し、以前道德と稱せられたものが唯自然的自己保存の爲めに使はれる時に起り、是は

現實全體を内部の必要からして絶えず進歩のある思想の過程と化せしむる確信と教義とに起つたのである、茲では道德は此超越的過程に對する個人の歸順に外ならなくなつた。此等は孰れも皆倫理的な人格的世界の建設に至らない、又單なる力の發展は行爲を推退けて了つた。かゝる一致した攻撃は基督教に取つて、其傳來の形に由つて代表された道德が毫も弱點から脱して居らぬ時には、愈々以て危険である。基督教傳來の教理では吾人の生活に於ける自然の要素、機械説の大なる擴張は殆んど價值なきものとせられて、主として自由に對する反抗が重んぜられ、罪惡が甚だしく個々の精神に推付けられるのである。且又、基督教的倫理は内的刺戟に力を與へ、道德的運動をば個人の考へより脱せしめて生活の實體に引入れるとを殆んど思はなかつた。道德が餘りに藝術や科學の如き他の範圍に全く接觸しない特別の範圍として顯はれることは之れと密接の關係を有して居るのだ。而かも實際に於ては道德的難問は實に生活全體を貫ぬい

て居り、且つ總ての範圍に一個の必須の高さを示して居るのである。さらば一個の善良なる品性の形成を直接に生活及び行爲の最高の目的となすは甚だ危険なる迷ひである、そは此事は寧ろ精神的精力の生成に於て求めねばならぬからである。しかしかゝる生成はそれ自身の中に主要條件として道德的高上をも含んで居る。吾人は此所にはすべて基督教的道德の傳來の状態をば既に出來上つた、結論の付いたものと見做さずして、寧ろ猶ほ進歩の中途にあるものと見做さねばならぬ。

吾人は當然これを爲すことが出来る、なせならば、宛かも基督教に於て既に顯はれて世界史的勢力となつたやうな、道德の根本眞理は其實行に關する有ゆる爭論や時代の有ゆる變遷に確かに超越して居るからである。唯人がそれを誤解し且つ眞正の道德の條件を誤解するときのみ議論が起る。道德は小我の解脱を望んで居るのだ。それは吾人の生存が互に相反對する元素の單なる駢列に過ぎぬ

間は一個の驚くべき空想のやうに思はれる、けれども全體よりの生活と又人間がそれに移り得るといふことが認められるや否や、それは空想でも何でも無い。道德は獨立の決斷即ち自己の行爲の上に生活の基礎を置くことを望んで居る。これは吾人人間が個々の與へられたる且つ閉鎖されたる世界の單なる斷片である間は無意義などである。しかし吾人が色々の世界階段が吾人に於て合致して吾人の決斷を望み、それと同時に吾人の生活の中に吾人の觀察が明かに示すやうな可能や要求や上昇が起つて來るとを認めるや否や、十分に理解されるやうになる。道德が其目的を他の總ての目的の上に超越せしめ且つ其價値を他の總ての價値の上に非常に超越せしむることは、其任務が他のものと同じ平面にあるやうに見ゆる間は、大膽な自惚れた、しかしこゝに生活の全状態を高めることが問題となつて居るといふ確信が起れば十分に正しいものとなる。

道德の概念は相當な偉大を得ねばならぬ、唯常に眼中に置かねばならぬこと

は、そは茲には單なる刹那の上に立つ個々の決斷に由りて來るにあらずして、生活の方向全體に關する決定、吾人の存在全體を浸潤し且つ形成しつゝある決定、愈々新たに完成し、而して引き下さうとする勢力に反抗して支へる決定によりて來るのであるといふことである。結局問題は生が唯吾人に於て起る丈であるか、乃至吾人がそれを自己の行爲と爲し得るかてふことに歸着する。生が唯吾人に起るだけならば、生は外面上如何に近接して居つても、内部は無關係で且つ闇黒になつてゐる、それに反して生が自己の行爲となれば、十分なる意味に於て吾人自己の生活となり、それと同時に内的光輝を得るのである。此所では生活は内容と精神に充滿してゐるけれども、彼所では如何に活動的であり、又光彩陸離たるものがあつても内容と精神とを缺いて居るのである。そこで結局凡ての靈性の關係して居る生の獨立自存の根本思想は唯道德と共に實現せられることになり、而してそれと同時に生活は道德と共に自由なものとなるのである。

夫故に基督教が道德の偉大と超越性として世界史的 생활の中に大いに認められるやうにしたのは大なる功蹟である。他の宗教のやうに基督教が道德をば一切を支配する世界勢力に高めず、其問題を世界顯象の中心點となさず、又現實の最後の深さを、よし見ないにしても聯想せしめなかつたか。基督教は人間の精神を救ふ爲に天地をも動かした、各個人の生活勞作に、外面上猶ほ不明瞭ながらも、永遠無窮に達する意義と價値とを與へた。基督教がそれと共に其始に於て人類に再び大なる目的と、同時に又生活の勇氣と力とを與へたが、又近代の哲學的道德も此本源から其力を得たのであつて、それに勵まされ温められることがなかつたならば其義務觀念は全く形式的で、權威なきもので終つたであらう。併し現代にありては其紛糾と難問とに對して、精神的活動の高さに高められ下等なる利己主義を征服し、甚だ恐るべきエビキュラス主義 (Epicureismus) を防ぎ、又生活に獨立自存を與ふる爲には、どうしても大なる道德的の力を要す

る。今や實にかく難問に充ちたる時代に於て道德の力を下落せしめて、それと共に世界勢力をも下落せしむる一層大なる不合理を基督教が之を與へ得るであらうか。

五、吾人の基督教に對する態度の問題は、吾人が傳來の基督教の中心主張即ち耶穌基督に於ける神子化身及び人類を神の大なる怒より救ふ爲めの贖罪的犠牲等に對して如何なる態度を取るか、問題の決定に際して非常に危険になつて來る。吾人は凡ての特殊の宗教の内部にある唯一の一切を支配する主なる真理に對する渴望が同時に大部分の實現を見出したこと、茲に歴史と超歴史と、人間の本性と神的本性との完全なる結合が人間の生存に測り難き深さの影響を蒙らしめ、且つそれに精神的接近を與へたこと、而して遂にかの中心點が一個の鞏固なる思想界を頑固な論法で顯はし、以て信者不動の確信と爲したことを認められた。しかしながら吾人は又近代が一切の個々の點並に又全體に對して斷乎

として反對したことを確かめた。近代はたゞに其の主なる真理の證明に對して大いに疑の念を挿むのみならず、又其内容に對して十分満足せぬのである。一人格に於ける神人の合一並に代償的犠牲殊に中保者の思想、同時に又彼の根本確信の發展に與つて力ある一切の教理即ち神の獨子、處女の誕生、地獄行、復活、昇天、神の右に坐すること、審判の爲めに再び來ること等、第二の信仰箇條全體、即ち基督教の固有の信條學は今や懷疑と否定と諍論との對象となつて居る。

吾人は生活の難問と宗教の人間の心の全體に於ける位置とを直接に認めて以て矛盾を脱した。同時に人間の生活が全體として大なる問題を自己の中に有し、而して此問題は宗教への轉向なくしては解決されないことが分つた。宗教なるものは吾人の見る所によれば常に世界的若くは普遍的のものと精神的勞作の全體を確かめ且つ深めるばかりでなく、又それに對して世界を超越せる生の獨立自存の新たなる階段を開發せねばならぬ。此所からして歴史的基督教の難問に

對する適切な理解及び基督教を浸潤し且つ之に生氣を與ふる甚深の根本的感情の十分なる評價とは見出される、しかしかの教理學との一致はたゞに成功せざるのみならず、却つてそれに對する反對が愈々益々烈しくなつた。なせならば、これまでは反對がむしろ精神生活の全状態から出て來たのだが、今や宗教自己の範圍から起つて來て、そして反對は吾人の生活が關係して居るかの必要なる根本真理は吾人の最早忍ぶとの出來ぬ一個の特別な範圍に結付けられて居り、それと共に一個の恐るべき分裂が吾人の精神の中に生じ、而して必然的のものが難問的のものに結付いて、彼の真理はよし獨立でないにしても其人間に對する働きに於て甚しく害されるといふとに向つて行つて居る。吾人は既に云ひ現はした確信よりして人的のものと神的のものととの間の本性の連絡を、もはや唯一の位置に限り、而して其媒介によりて他のものに同じ連絡を生ぜしむることは出來ぬ、寧ろ吾人の宗教的確信は吾人をして強いて人的のものと神的のもの

との直接の關係をば精神生活の全體を通じて要求せしむるのである。吾人は又神の愛と恩寵とを唯耶蘇基督にのみ現はれるものとするとは出来ぬ、かの獨斷的教義の建設の根柢たる觀念、取も迄さす自分の子の血に由つて始めて和らげられる神の怒の觀念はむしろ餘りに擬人的(anthropomorphisch)なものであるとして、又純粹な神性の概念と一致せぬものとして棄て、了はねばならぬ。吾人はいよゝゝそれを棄てなければならぬのだが、又其中に同様の必然的な難かしい問題のあるとを認めねばならぬ。そは即ち世界の秩序並に人間の生活に於ける義と愛との關係及び道義的峻嚴と宥恕的溫和との關係の難問である。しかし此の難問が高まれば高まる程解決の維持は愈々不可能になる。それは吾人に取つて內的に没交渉で、且つ有害になす所のものだ。又耶蘇の人格の形の中に神的のものと人的のものとを互に混合する所のものは凡て斷然驅逐するの已むを得ざらしめる宗教的動機が同じく吾人に強いられる。茲ではたゞに古い、それ自身に於て

合理的な神人の教義に對して反對せねばならぬのみならず、又耶蘇基督を絕對的主又師と稱し、而して吾人の宗教生活全體を確かに彼に結付け、同時に彼に對して一切の獨立を吾人より取去り、吾人自己の生活を十分の根元より奪ひ去るに拘らず、彼の教義を棄てる現代の生半過なることに對しても亦大いに反對すべきである。獨り個人個人のみならず、基督教も亦全體として此理解の下に行き惱んで居る。何となればそは全然此一點に拘束されて、其中に働らいて居る真理の維持てふことに限られて居るからである。斯様に制限されて居つては到底基督教は世界歴史の全體を浸潤し、愈々益々若返つて、凡ての時代に立入つて、それを又特別な種類に高めることは難かしい、又基督教が吾人を十分に動かすのには當然あるべきやうな吾人凡てのものに共通の不斷の事業とならなゝ。然らば歴史的批評が耶蘇の形像について爲しつゝある一切の動搖は基督教全體の害となるべきは到底避くることが出来ない。此點は宗教の傳來の理解に

對する反對がたゞ外からのみ來らずして、又宗教其物からも顯はれて來ることを示して居る。かゝる反對は事柄をば一個の單に知的の主張から神聖の義務、倫理的要求とするが故に殊に危険である。

しかし吾人が此凡てを認めれば認むる程、吾人は益々斷乎として弱々しい中保の試みに反抗し、吾人自己の確信が一切の事實に缺くべからざるものであつて動搖せる思想や傾向には從屬して居らないかどうかといふ問題、及びそれと同時に又かの教理的歴史的事實の放棄と共に基督教の核心との一切の連絡が吾人に失はれるではないかといふ進んだ問題が愈々逼迫して來る。

此二の問題は精神生活の範圍、取も直さず宗教の範圍に於ても、一體事實とは如何なる意味であるかといふ難問を再び指示して居る。事實とはこゝでは外部から吾人に向つて來る出來事ではない、寧ろ一切の真正なる事實はこゝでは内部に屬すべきものである。しかし此内部に起るものと雖も亦個々の經驗としては

十分の安定を得ない、何となれば總て此種のもは種々な連絡に持來されて、種々に理解されるからである。かの安定は唯總て個々のものを支持し、而して敢て外部より説明さるゝを竣たずして、自から十分明かなる顯象全體及び運動全體によりて始めて得らるゝのである。

かゝる總體的運動が吾人の中にあり、而して精神に向つては全體より全體に對する問題を提出して居るといふことは、吾人の人間生活の觀察の主なる結果であつた。一切の事實は内的生活の獨立、吾人の領分に於ける現實の新なる階段の發顯の主要且つ根本事實に總括された。此の總體的事實はそれ自身に於て一個の進んだ運動、個人の意見や説明を遙かに超絶しつゝある進んだ上昇を示して居るのだ。精神生活の此の根本事實は嘗て人間を根本的に單なる動物の上を高むる凡てのものを産出し、而して精神的文明に於て一個の大なる連絡を造り上げる世界史的勢力として現はれた、しかしそれは同時に各個人の精神の中にも

直接の現在を得た。なせならば凡ての地位に於て、精神生活をこゝに捉へて之を完成し精神的精力となる爲に精神的自我を獲得せねばならぬからである。斯の如く世界顯象の核心が同時に各個人直接の経験及び一個の強制的任務なり得るといふとは、根本確信に確實と精神的接近とを與へ且つそれと共に生活に對して一個の確固なる根柢と一切の疑問に對する保護とを與ふるのである。傳説と周圍とが吾人に持來したる一切のものは此精神的事實に關係すべきである。すべてかものから活力を得、而して特別なる時代状態に關係して居つて、それと共に亡びねばならないものはそこから測られ、そこからして光耀され又生氣を與へられる。傳來の基督教の總體も亦此種の測量を免れる譯に行かぬ、こゝからして始めて其真理内容は純粹に發展して十分の働きをするやうに明かにさるゝのである。

若し吾人が斯の如く宗教の上に決定を與ふる事實は生に附屬せるものにあら

ずして寧ろ其中にあり、且つ其事實は外部より精神に向つて來たのでなく、總括的行爲に由つて自得したるものを精神の中から高めねばならぬといふ確信の上に立つとすれば、かくの如く事實を不可見の世界に移すことは、それと共に一切の鞏固なる成立は無くなるであらうといふ非難に會ひ易い。しかし吾人は此非難を斥けて、益々生活の重心を外部から内部へ、可見のものより不可見のものへ移し、且つ官能的に捉へることの出来るもの、前に思想の偉大の世界を置き、そして其所から官能的のものをして自から新たなる光の中に見せしめる所の歴史の全經過の證明の上に立つて居るのである。宗教は特別な強さを以て此運動に與つて居る。其中には根本的進歩がなかつた。それは官能的のものを非官能的のもの、前に遙かに退かせるを伴はなかつた。斯の如く基督教も爲した、而して其歴史の中にもやはり其通りであつた。昔の階段に止まつたものには新しいものは本質の破壊及び蒸發と思はれねばならなかつた。古い基督教

は往々無神論を教ふるものと訴へられた、且つ今日も猶ほカトリック教はプロテスタントの如く具體的のものを離れた不明瞭な宗教をば宗教と名づくることに反對して居る。しかし進歩した人人には其標準を與へるが進歩に後れた人人はさうでない。そこで、若し吾人が見るべきものより見るべからざるものへの一層進んだ轉向を要求し、而して眞の現實を官能的分明からいよく嚴格に分離しやうとするならば、それは世界史的運動の進行に一致して居るのである。

しかし此轉向が其儘の基督教に相應したことであるかどうか、又吾人は其轉向と共に基督教から離れるではないかどうかといふ疑問が起つて来る。若し歴史の基督教も亦其教理的解釋よりも遙かに勝つて居らぬとすれば吾人は必ず基督教から分離したであらう。實際かの教理的解釋は一個の具體化 (Verkörperung) に過ぎなかつた。それは確かに必要ではあつたらうが、しかし生活の全體を形作らず、又常に精神の表顯としてのみ其存在の權利を有して居つた。基督

教がかの具體化の形成以前にあつたやうに、一切の時代に對してそれを超越した又それに關係のない生活を發展する、何となれば其精神は常にある單純な直接のものであり、又精神と神との直接の關係であつたからである。それから遠ざかれば動搖を來し、再びそれに結ばれば高められる。かの具體化の中に常に一層進んだ完成と一層大なる混雜との傾向がありとすれば、かの直接の生活は之に根本的單純、素樸な人性及び完全なる精神的接近の渴望を對立する。宗教的生活が若返る力を以て顯はれる所にはどこでも其通りであつた。又カトリック教會の内部に於てもアシ、のフランシスやトマス、ア、ケンピスに於てさうであつた。又基督に關係せずして直接に神に關係したけれども、凡ての神祕主義に於てもさうであつた。而してかくて宗教的生活の一切の頂點は實に有効なのだ、此領分に於ても亦單純なものは偉大にして有益なるものである。しかし吾人がアウグスチンの懺悔録やバスカルの宗教に關する思想を觀察するならば、そ

こには精神と神との直接の關係、烈しい攻撃中に於ける精神の維持といふことの外何物も動いて居らない。「余は唯神と精神とを知らんと欲す、其外何物をも知らんと欲せず、其外何物をも」と、かくアウグスティンは考へた。さればもし精神生活の内部に於ける出來事が吾人に主要事と考へられ且つ主要事として取扱はれさへすれば靈の宗教たる基督教の連絡から離れることはない。

しかし吾人はそれと共に傳來の狀態の著しい發展の必要を忘れない。生の内的運動は以前は具體化と其儘相并んで居つて、それと衝突しなかつたばかりか、その中に往々甚だ願はしい補充を見出した。けれども今日は一時的氣分に由るにあらずして、むしろ時代の總體的發達に由つて精神と具體化との間の衝突が吾人の意識に上つて來た、而して今問題となつて居ることは、肉體が精神を固持するか或ひは精神が肉體と同化するかどうかといふことである。設令精神が勝つにしても、それは再び具體化を要求するであらう、けれどもそれは現々の世

界史的狀態から要求するのであつて、過ぎ去つた時代の種類からではない。此精神的ものは生が一個の全體に總括されて個人個人を超越すればする程、愈々主要事となるであらう。しかし生は精神生活の既に述べたる解釋に於てのみ超越するであらう。

かゝる立場からしてかの教理的思想界の個々の教義を解釋して、その中に永久的眞理内容を一時的意味から分離するといふことは、吾人の觀察の限界を遙かに越えるであらう。唯簡單に注意すべきことは、吾人の確信に於ても亦、人なる耶蘇の人格は決して超越的意義を失はず、殊にそが單なる知識の教師に墮落しないといふことである。一切の精神的活動、一切の革新的向上的活動は二三の僅かなる人格の關係することであつて、他のものはそれに對して單なる助手若くば全く單なる環象に過ぎぬ。凡ての活動は人格其者が其中に本然の特質を見出して、働作の中に精神的自己保存の爲めの戰爭を仕遂げて最後の大勝を博す

るに至つて始めて成立つたのである。吾人は創造的人格がかゝる飛躍に際して自己の力の上に立たずして、神の力に驅られたのだと感じ、而して彼等の勞苦に依りて出來たものを神の力の啓示として領會したことを認めた。もしかゝる偉大の稀有と、偉大に於ける從屬の意識が精神的勞作の個々の範圍に有効であるとすれば、況んや宗教に於けるが如き生活全體の特色が問題となる所では猶更有効でなければならぬ。新しいもの、發顯は此所では一層十分の根元を有し、それは一切の古いものとの一層烈しい衝突、一切の連絡の破壊を意味し又獨立の生の本源を確かめるのだ。同時に茲では一層高い力に從屬することの意識は神と精神的に合致して居るといふ意識に高められる。茲では變化と奇跡が遙かに大なるだけに、又創造的人格も甚だ稀れである。而して二三の僅かな人格を中心として世界歴史の全體は動いて居る。しかし耶蘇は何故に彼等の中にありて獨特別な地位と特別な高さとを占有して居るのであるか、それは吾人の説明を

要しない所のものである。

吾人はしかしながら創造的人格に於ける緊要且つ貴重なるものに關する吾人の確信は耶蘇の教理的地位を要件とするものよりも歴史の批評の疑念に對して反抗する力があることを記憶して置きたい、何となれば此地位の形は後の種屬の尊崇から起つたよりも耶蘇の自己の確信を再び與へぬといふことは殆んど疑ふことが出來ぬからである。それに反して耶蘇に於て見るやうな生の全く固有な構成は後から追加されたものでもなければ又一つ一つの縫ひ合されたものでもない、かくて茲に疑ふべからざる事實が與へられる。

しかしながらかの明晰なる個性に於て内部の制限もないとすれば、個性は其特色を以て凡ての時代に對して働くことが出来るか、といふ質問を吾人は聞くのである。それは其特別な特質を凡てのものに賦與するといふ仕方でないとは確かである。「基督の模倣」てふことがさういふ風に理解されるならば、そこ

に多くの誤りや混雜が生じて来る。しかし精神的のものとしてはかゝる創造的人格は一個の偶然的特色に過ぎない。個性は其意味に於て永久的のもの及びいつも元氣あるものを含んで居る。そは難問を豫期せざる高さに高め、吾人を新なる世界に移し、其本質をば一切を統率する任務の中に全く培することに依りて覺醒激勵の不思議なる力を與へるのである。其者の實現は吾人に取りては大きな刺戟、新生の本源となり、吾人はそれによりて吾人を形造り、富ませ、高めることを得、その上に吾人の自己の生活の根元を失ひ、吾人の特色は少しも害せられない。何となればこゝでは吾人に向つて来るものに奴隸的に忍従することでもなければ、又他の權力の下に膝を屈することでもなく、時代の推移と個人個人の敵意ある分裂とを超越したる世界の獲得に由りて吾人の最も固有なる精神的本質が覺醒せられ完成さるゝことを意味するからである。

六、吾人は教會の難問について反覆論ずる所あり、以て一切の缺點と害とを

認めつゝも猶ほ一個の宗教的團體の缺くべからざるものなることを確かめた。基督教は大膽に既存の世界に對して一個の新なる世界を建設し、且つ努力して得たる神の國をば遙か遠方に置かずして、むしろそを人間生存の中に輸入しやうとすれば、宗教的團體は殊に緊要にして又價值あるものである。意思の大きに相應して紛糾と危険の大なるは通例である。不斷の戦争は獨り外部に向つてのみ起らずして、又基督教の内部にも起つた。而して宗教改革に於ける教會と個人との關係に就ての論争は最も大なる分裂を喚起した、之れ基督教の歴史の熟知する所である。

若し吾人が後ろを顧みずして、前を望んで進まんとするならば、宗教と文明との分離に伴ふ現代の事物の状態が吾人に課する諸の問題に觸れなければならぬ。教會生活は此分離の影響を受けて今日反對の方向に向つて分れつゝある。一方に於ては文明をば宗教の主權の下に置かんとする努力を有つて居る、即ち

唯だ教會の思想に一致し適合するものゝみ認めて、凡て異つた道を行くものは異端迷妄として排斥するのである。今や吾人が既に確かめたやうに實際時代の運動の中に大なる變化がありとすれば、彼の處置からして精神家に對する大なる壓迫や精神的停滯は起らない筈だ。現代主義反對の法王の廻章や反現代主義同盟は遂に人類の到達する所を明瞭に示して居る。又他の一面には宗教と文明とを出來得る限り分離し、且つ一個の特別なる領域を指示することに依りて多くの紛糾より脱せんと勉めて居る。殊に多くの新教徒に於て然り。しかしそれと共に宗教はともすると主觀的感情の單なる刺戟となる。其高調されたる感情は精神的本體の缺乏を覆ふことが出來ぬ。又其中には一個の團體を形成しやうといふ欲望もない。然らば宗教は實に總ての危險より脱し、文明との衝突を避けるとは出來るが、しかし人類に對して何等根本的に新しいものを持來すことを得ず、同時に一切の引着力をも失ひ、人をして宗教に冷淡ならしむる惧れがある。

かくて現代人の氣分は教會なるものに對して壓迫の苦痛と冷淡との間に動搖して居る。生活の平凡な間は拒絶の勝つのは敢て不思議でない。

教會に對する大なる反情の事實が些かも否認されず、又弱められぬとすれば、此感情は表面からして更らに生活の最も深き根柢にまで及んで居るかどうか、或ひは寧ろ此感情から、よし既存の教會に反對しても、一個の宗教的團體に對する強烈なる渴望が起つてくるではないかどうか、疑問である。吾人は現代生活が其獨特の性質を發揮すればする程、其制限が益々明かになり、それと同時に其缺陷を補はんとする要求が益々烈しくなることを認めた。それにはしかし人間が宗教てふ記號の下に結合されることが必要であるやうに思れる。外界が吾人を引着ることが強ければ強い程、又それが吾人を確りと捕へれば捕へる程、或る組織に於ける同じ精神の團結に由りて内心の強められんことを渴望するの念は益々烈しくなつてくる。又甚だ急がはしき勞作が生活を刹那に結付け、

而して將來に執着して總ての現在を打忘れしむることが多ければ多い程、或る固執の状態と時代を超越した現在の獲得が愈々必要になつてくる。それには時代の推移に反對して共同的生活に於て永久の眞理を代表する一個の秩序がなければならぬ。吾人が更らに一步を進めて、自然の生存競争が如何に社會的共同生活に於て愈々殘忍なる競争となりつゝあるか、現代生活が如何に人間をば、外部の接觸を繁からしむるに拘らず、却つて益々孤獨なるものとしつゝあるか、又如何に權力と快樂の追求が内的の財を得んとする心を推退けて、其自價を暗ましつゝあるか等を熟考し、且つ之れに由りて内的生活が萎縮しつゝあることを考へれば、一個の生活範圍の構成に對する渴望が深奥なる精神を捉へることが全く能く理解される。そは内部の問題を一個の自己目的 (Selbstzweck) として取扱ひ、精神生活の世界史的状態と反對せずして反つて之れと一致せしめて、生活の皮相化せんとすることに反抗する所のものである。かゝる生活範圍が發展

して來れば、宗教と文明とは些かも互に相反抗し、分離する必要はない。唯一個の共同の精神生活が兩者を包擁し、而かも宗教に在りては精神的本體と人間の所有の形とが明瞭に區別され、文明に在りては精神の文明と人間の文明とが明瞭に區別されるのである。宗教的團體が今日此兩側面を認めて其の一致を求め、かゝる努力に由つて始めて大なる意義を得ることは、次の一二の點に於て示される。

宗教は共同的生活に於て政治的勢力乃至社會的幸福と云つたやうな他の目的の爲の方便となつてはならぬ。その根本的のもの、其内心及び世界超越性はそれによつて容易く失はれるであらう。しかし宗教をば自己目的として認めることは、宗教を生活から引離して彼岸の事柄に關する教とするといふ意味ではない、寧ろ宗教を生活の全體から出て來たものと理解するものは、こゝにも亦其任務を見出すであらう、又人間の生存を確實にし、完全にし、且つ之を高める

ことを殊に宗教に期待するであらう。それにはどうしても時代の中に大膽に入つて、其苦勞と困難とを眞面目に研究せねばならぬ、さりとて又單に此世に自己を打任かしてはならぬ。一個の超越的立場からして其中により以上のものを發見し、一層それを運かして行き一層大なる連絡の中に見且つ取扱はねばならぬ。『人間の中に神を求めざるべからず』、人間全體に關する一切の時代の難問は宗教的團體をも働かして行かねばならぬ。宗教の高さは決して棄つべきでない、むしろそれを生活の全體に對して一層密接な關係を結ばしむべきである。此世を過重してはならぬが、しかしそれを內的に高めて其中に一個の世界超越的生活を現はさねばならぬ。時代に屈服するのは宜しくないが、しかし一層それと關係を深くして、其中にある永遠のものを見出さねばならぬ。

現代は全く特有なものであつて、其中に無限の問題を有つて居る。例へばそこに青年神學者等が實際尙ほ宗教改革が其確信に基づいて聖書の價値を要求し

たやうな哲學的歴史的の種類に於て其知識を維持しつゝあることは驚くべきではないか。聖書はどこまでも尊ねばならぬが、しかし例へばヘブライ語の研究が時代の社會的難問の中に根本的に引入れると云ふことよりも必要なこととするのは果して正しいことであらうか。『言葉(即ち外國語)は靈の刀を入れる、鞘の如きものなり』てフルツテルの言は其當時も非常に利目のあつた言であるが、吾人に對しても亦大なる意義を有つて居るではあるまいか。教會にしてもし時代と密接なる接觸を求めないならば、時代が教會に對して冷淡になるからといつて、毫も怪しむるに足らぬのである。

行に於てこの世界を浸潤せねばならぬが、又信仰に於ても生活の過程と一の密接な關係を結ばねばならぬ。無論宗教的團體は宗教から起つた特有の思想界を要するが、此世界を他の範圍の結果に結付けるならば、何等確固なるものを以て時代の運動に反對することを得ずして、反つて時代表面の變轉極まりなき

潮流に彼方此方に推流さるゝであらう。凡ての反對に恐れて時代に對つて何等有力な批評を爲さず又時代に反抗して何等進取的のものを發揮せざる宗教的團體は既に獨立的存在の權利を失へるものである。

他の一面には歴史の證明及び吾人自己の説明に従へば宗教は時代周圍との衝突に由りて非常なる困難に陥るといふ懼れがある。かゝる紛糾に對するには唯宗教的團體が眞理の上に立ち、眞理に支へられるより外はない、しかし其眞理は直接に生活過程其物に屬するものであつて、形而上學的の冥想や歴史的傳説によりて始めて起つたものでなければならぬ。即ち人間に於ける新世界の發顯し且つ戰鬪と動搖とを経て此世界の發展する事實に關係し、且つ之を代表する眞理でなければならぬ。そは一個の根柢を與へる、戰鬪的征服的な靈性の事實である。此中心眞理は教會が之をどこまでも維持し、これが爲めに勇ましく戦はねばならぬ。しかし常に周圍の顯象は此中心を動かすことを得ず、又現實の事

實的發展は現實に關する有ゆる説を安全に超絶して居るといふ確信に支へられて居らねばならぬ。かゝる眞理こそ能く人間の本性と密接に結合することが出来る。そして其れを辯護することはやがて精神的自己保存の事柄となる。そこに最も確實なるものが得られる。たゞかゝる事實に由りてのみ精神生活の建設に於ける人類全體の共同的經驗は同時に各個人の直接の經驗及び任務となるのである。此の生の眞理は又、根本内容の確固不動に形式の不定と、同時に時代の運動との密接なる接觸とを結合することを得せしむるのである。何となれば有ゆる顯象や現示に對して根本過程の超越性が十分に認められれば、そこに眞理は同時に確固不動の事實、常に新なる任務となり、既に有てる者を以て満足せずして益々新なるものを求め、吾人の中に働らいて居る深さが益々完全なる自己活動と變ることを要求するからである。こゝでは時代の運動は超越的眞理に一個の益々完全なる表顯を與へる用を爲すのである。神的眞理に關する人間の

解釋は結局一個の象徴に過ぎぬ。要はたゞ此象徴が果して最も適切なものであるか、或ひは此象徴とそが現さうとする真理との間に果して隔たりがないかどうかといふことである。若しさういふ隔たりがあれば生活は忽ちにして崩壊し宗教的思想界は其安定と其確信力とを失墜してすう。しかし反對を全く征服するのには、どうしても傳來の教理が思想界の仁核を形造らずして、根本的生の真理がそれを形造らねばならぬ。

結局問題は宗教的團體が一切を包括する、人間の保存に缺くべからざる唯一の真理を所有し且つ之を代表するかといふことに歸着する。前に教會によりて代表せられたる神子化身及び基督の中保の主要真理が吾人の信仰の世界史的状態に對して甚だ薄弱となり、而して新しいものが猶ほ十分に一個の全體に結合せられず、又一切の主觀的思想を超越したる事實の確定とならなかつたのは殊に教會の宗教生活の動搖の罪である。これは宗教的團體を強め且つ若返らせね

ばならぬ主なる條件、主なる渴望の起る所以のものである。しかしそれは決して難かしいことでない。蓋し吾人の生活の中に大なる一切を包括する事實があり、それが不斷の勞作を吾人に要求して居るからである。是は現實の新なる階段の發顯、宇宙の全體より發する生の開始である。これを我有とするのには吾人は須らく共同の勞作によりて吾人のうちにも亦一個の精神の世界を建設せねばならぬ。しかし此問題は唯だ人間の状態の平凡に反對して一の大なる深さを實現することによりてのみ解決すべきものであり、又宗教への轉向なしにはそれに向つて眞の成功を見ることを得ぬとすれば、宗教的團體も亦一切を統率する目的と、同時に永久的價值とを有するのである。時代の状態が先づ第一に過去に對して獨立することを要求し、而して其獨立が確實になればなる程、過去との一致も亦益々多く見出され、種々の時代の功蹟は一個の共同の事業の中に總括せられるのである。

總括

基督教の維持てふことは個々の點に於て傳來の狀態に對して著しい變化を要求して居る。宗教は人間の活動に一層密接に結合して、それと同時に一層強く世界を浸潤せねばならぬ。精神生活は人間の本然及び狀態に對して一層獨立し、自づから個人的及非個人的解釋の反對を征服せなければならぬ、それは唯根本的高擧によりてのみ出来る。救濟思想に於ては新なる肯定が益々大なる意義を有せねばならぬ。基督教的道德は一層大なる運動の高さを形造らねばならぬ。宗教の中心事實は人間及び人類に對する新なる生の建設の中に移され、それと共に一層大なる精神的接近を得ねばならぬ。教會も亦遂に生活の事實及び生活の任務の支持者とならねばならぬ。斯くの如く種々雑多な要求がある。しかし是等のものは單に何等の連絡もなく駢列して居るのではなく、全く一貫せる渴

望の色々な側面に過ぎない。而して是等は皆同じ方向、即ち基督教が其中に有する生命を一層獨立させて、其所よりして基督教の世界を描き出さねばならぬといふ一點に向つて居るのである。要するに一層深く生活過程に結合して、其中に顯はるゝ基督教、一層元始的に、一層普遍的に又一層積極的に、一層男性的なる基督教を形成するといふことである。斯る基督教は既に出來上つて了つた事業にあらずして、今猶ほ進歩の中途にある運動である。吾人は此運動の協働者又新生の共同的支持者とならねばならぬ。捉はれたる世界に對して始めて新なる世界の勃興を意味せし第一世紀の基督教に於ては、各人が其地位に於て共同の事業を自動的に繼續せねばならぬといふ考があり、又偉大なる力が行爲の強き刺戟として精神の上に働いて居ると信じて居つた。オリゲネスは此思想を最も善く言ひ顯はして居る、曰く『真正なる基督の信者たるものは常に基督を信ずるのみならず、又一個の基督となり、彼の生命と苦痛とを以て同胞の救

ひの爲めに盡さざるべからず』と、今日と雖も亦基督教は激しい、恐らくは猶益々困難な戦闘の中に立つて居る。唯此戦闘に勝を得るの道は基督教が共同の繼續せる事業として取扱はれ、そして信者が唯それを信ずるといふばかりでなく、又自らそれを建設するにある。政治上の経験でさへも、國家生活に於ける趣味は唯個々の市民が自動的に全體に與かり、其全體に對して内的責任を感じるときにのみ暖かに且つ有力なものとなり、唯上から下に命令さるゝときに却つて盛んになつてこないといふとを示して居るではないか。況んや宗教に對しては吾人はそれを自己の事件として進めて行き、其の辯護に努めない以上は全力を盡くして其宗教を愛し且つ之が爲に働く譯にゆかぬ。宗教が以上述べたやうな方法によりて生活の深奥なる仁核に移され、單に個人個人のみならず又人類全體の精神的自己保存に對する欲求として理解さるゝより外に、宗教は全體として吾人の自己活動の事件となることを得ぬであらう。

活動の高まるといふことのうちには自然確實の生長といふことが含まれて居る。蓋し吾人に取りて吾人の自己の生活に其特質を與へ、且つ精神生活として創造するものよりも確實なものはなく、又それは外部から證據立てられたり支持されたりすることを要せぬのである。吾人が此生に結付けば結付く程、それに由りて一切の仁核たるべき一個の事實に與かれば與かる程、不透明なることは愈々少なくなり、吾人は周圍世界の敵を恐れないうらになり、愈々確實に根本真理をば一切の反對に對して維持するであらう。宗教と精神生活の根本事實との密接なる結合が抑も如何なるものを貢獻するかを會得するならば、吾人はかゝる結合によりて宗教の衰退が來るなど、心配する必要はないと信ずる。

且又、實際を言へば、此新たに得たるものは猶ほ基督教の内部にあるかどうか、或ひはそれは基督教の範圍以外に出て居るかどうかといふ心配がある。之れに對する解答は、元來一個の宗教に屬するといふとは如何なる意味のものであ

るか、又宗教の仁核本質はそも／＼何であるかといふとに關係して居る。宗教がもし教義や制度の一個の組織を意味するとすれば、唯此の組織の全體を奉ずるものゝみはその信者と云ふことになる。しかし宗教が先づ第一に生と交渉するものとするれば、其特有の本質は生の固有なる構成の中にあるのである。然らば問題は吾人が果して生のこの構成に與かり、こゝに開發されたる生活の運動の中に這入り、且つその方向に向つて進みつゝあるか、或ひは吾人が其反對なことをして居るかどうかといふことにある。

基督教が人類の全體の中に置かれたる難問をば最も廣い範圍に於て取入れて、之を最も大なる深さに持つて行き、そして其明かなる特徴と共に又一個の普遍性を既に出來上つた功蹟として、なく、むしろ猶繼續し、益々勃興しつゝある運動として、要求して居るとを吾人は今や一般に明かにした。かゝる運動に加はるといふとは、たゞ既に出來上つたものに満足することではなくて、寧ろ全

體の働作活動を我有として、全力を盡くしてそれを前へ進めて行くことを意味するのだ。斯る運動はまた最も意味ある種類の事實である。茲に一個の特色に富んだ生の典型が出來た。そしてそれが同化の作用を以て世界歴史全體を一貫して居る。それを評價するとき、吾人の生活が最も內的に觀れば甚だ制限された、又容易く見通すとの出來る可能性を有するといふことを忘れてはならぬ。吾人を支配すべき可能性は生活を其廣さ深さに隨つて最も多く包括し且つ發展するものでなければならなかつた。これはしかし唯基督教的な生活典型の能くする所だ、歴史的基督教はそこでは一個の永遠の基督教の上に立つて居る。しかしこの永遠の基督教が歴史的基督教を先づ歴史の地盤の上に發顯せしめ、世界史的の勢力とならしめたといふことは大なる意味を有する。斯くして始めて前にはらばらになつて居た眞理は一個の全體に結合せられ、而して全體として働くやうになつたのである。今や先づ反對との戦争が始まつた、而して有ゆる不完全

に於て最も高い目的に向けられたる歴史的具體化は成立つた、之れが即ち吾人が今日立つて居る立場に吾人を連れて來たのである。時代のこの大なる運動から離れて、人類甚深の經驗に全く注意を拂はぬといふことは、やがて虚無に陥り生を貧弱なる主觀性に引き渡して了ふといふことである。

吾人の研究に依れば、今日新しきものを要求しつゝあるものは根本真理と衝突せずして寧ろそを生の世界史的狀態に應じて益々發展することが明かになつた。吾人は一個の世界を超越せる又世界を浸潤せる宗教を維持することの必要を認め、否らざれば全く精神的活動を可能にし、且つ前さへ進まうとする急がしさに對抗して能く生の獨立自存を顯はす譯にはゆかぬ。吾人は基督教が殊に確かに代表しつゝある精神生活の超越性は近代の立場に於ても亦主張することを得、又主張せざるべからざるものなることを認めた。人間の精神的活動は決して個々の點の能力の上に置かるべきものにあらずして、唯全體よりの生

の活きたる現在によりてのみ外部の障礙も内部の分裂も共に征服し得ることを知つた。かゝる生は既にあるものを單に高めるのみでなく、實に根本的變化を爲さしめるのである。吾人は又、特有なる基督教的道德の意義及び道德的概念の生活全體を指導すべき權利を確かめた。吾人は生活を固め且つ正だす事實に益々溯らねばならなかつた、けれども一の中心的精神的事實は決して缺くべからざるものである。宗教の内部に於て個々の人格に永久的の意義を與ふる可能も亦それと共に生じて來た。宗教てふ記號の下に獨立的團體も亦必要缺くべからざることを示した。かくて世界史的狀態が要求しつゝある變化は根本真理及び根本事實の内部にあることになる。此真理すらも、其發展が吾人々間に在りて種々の階級を通過することによりて動搖を來しつゝある。斯る熟考よりして、吾人は今日尙基督教徒たり得るやてふ疑問を喜んで首肯し得ると信ずる。

基督教が其特色に於てたゞに一個の資格のみならず、又一個の超越性と永久

的真理を有することは、其特有の性質が他の宗教の夫れと、又今日文明よりして宗教的運動に於て基督教に反對するものと一致することによりて確かめられる。

他の宗教といふのは茲では猶太教と印度の諸宗教のことを謂ふのだ。猶太教は其道德の純潔と嚴格なるとに由りて偉大である、猶太教は人間の自由を尊び人間をして活動に精勵ならしめ、且つ人間を一層強き生活の肯定に導くのである。猶太教は永い間の闇黒時代を通つても猶ほ快潤なる生活の勇氣を維持し、殊に彼と同じ境遇を求むる社會的犠牲心を産み出した。しかし猶太教はかゝる功蹟を有つて居るが又内部の制限をも有つて居る。救濟的宗教の意味に於て人間生活の革新變革を完成しないそれ故に又生活の新しい立場を得ない、而して苦痛闇黒、罪惡をも其必要な深さに於て認め得ない、猶太教は非常な樂天主義なしには立行かない、而して或る單調を征服し得ない。猶太教は精神的の熱を唯

だ小さい狹隘な主觀的な範圍の確信によりて得た。その關係を離れば、ともすれば抽象的に且つ智力的にならふとする。基督教の出顯以來猶太教は世界史的運動に追ひ越されて了つた。けれども基督教は遙かに無比のものを有し、而して容易く文明運動に對抗することが出来た。

印度の諸宗教は全く反對の方向を示して居る。印度の宗教は世界と生活の轉向をば驚くばかりの力を以て完成した、そしてそれを精神に直接の經驗と爲した。此所では一切の努力は假相及生成の世界より永遠の統一への轉向の問題に關係して居るが故に、生活は大いに單純なものとなり、そこに溫和な高尚な氣分が生存全體を浸潤して居る。しかしながら印度の宗教に於ては基督教に於けるが如く運動が此世に新しい價値を與へる爲に世界の否定から再び世界へ歸つて來ない。生活は其非人格的な形では十分なる活動に達する途を見出さないうで、單に瞑想に止まつて居る。單に瞑想だけの形而上學の上では倫理は其存在の權利

を有たない。

基督教と雖も亦世界の轉向を完成する、その意時に於て基督教は形而上學をも含んで居る。しかし此の形而上學は生活、取も直さず其倫理的經驗から出て居る。夫故にそは遙かに力強きものであつて、高上の働を以て再び世界に歸つて来て、それを根柢から革新することが出来る。されば基督教は他の諸宗教の難問を自分の中に取り入れてそれを全く征服することが出来る。基督教はかゝる大なる廣さを有するに拘らず單純なものになつて個人に解り易くすることの出来ない危険に陥る。しかし吾人は基督教其物の最も内部の本質よりして實に善くかゝる錯雜に對抗し得ることを認めた。現代は確かにそれを要求して居るのである。

最後に猶一言して置きたいことは、基督教的生活典型即ち基督教的生活運動は今日宙に浮んで居る宗教心に於て發展して、其自惚の考へに於て基督教を上

から見下すことが出来ると思つて居る總てのものを如何に超越して居るかを認めたことである。實に此宙に浮んで居る宗教心にもそれが單なる過去に執着することに反對して直接の宗教生活を要求するのは、尤もな要求である。しかしかゝる直接の宗教生活よりして宗教の内容を得やうとすれば、どうしても單なる個人の主觀性、獨立の個人個人の僥倖を超越した精神生活に高められねばならぬ。唯此の精神生活から大なる經驗は出てくる、又そこからして歴史に對する親しい關係も得られるのである。しかし主觀が唯自分の上に立つて居るならば、空虚な感情の頼ない動搖から脱することが出来ない。又個人個人を內的に結合することも出来ない。何となれば一體主觀性といふものは個人個人を反つて引離すからである。そこでかゝる頼ないものからどうして吾人の生活を襲ひつゝある多くの敵や闇黒に對して力強く反抗し、且つ時代表面の變轉極まりなき潮流に對して堅固な支持が得られやう。此生活は若し十分に否むるとの出来ない

い、同じ基督教に由らなければかの宗教心は將來に對して多くの約束を有つて居る始めではなくして、唯宗教的危機の一徴候に過ぎぬ。しかし此危機は基督教を見棄てることに由つて征服されない、寧ろ基督教を發達させることに由て征服される、それは又世界史的勞作を烈しく排斥することではなくて、此勞作を眞理及び永遠の内容に歸入することによりて征服される。

第二章 現存教會内部に於ける

革新の不可能

基督教は其教會的構成よりも遙かに大なるものであるといふことは吾人の研究の根本確信であつた。唯此確信に由つてのみ基督教と精神生活現在の状態との間の一致を要求することが出来る。それで基督教に對する吾人の斷定は必ずしも個々の教會に對する斷定といふ譯ではない。個々の教會が果して世界史的

の運動を取入れて、それと共に基督教を今日の教會の上に高め得るや否やはこれから研究せねばならぬ。けれども吾人は先づ獨逸人、主として西歐人に關係のある教會、即ちカトリック教及びプロテスタントに限らねばならぬ。そして其全體の状態でなく、唯其基督教の發達の問題に對する地位に於て觀察しやうと思ふ。

一 カトリック教

カトリック教が彼の發達を拒絶しつゝあり、又其根本觀念に従へばどうしてもそれを拒絶せねばならぬことは、全く争はれぬ事實である。カトリック教會は基督教が中世紀の絶頂に於て達したる形を最後の決定を與へるものとして説明するが故に、其存在の表面に於ける發達は認めるけれども、その根本内容に於てはそれを認めることを得ない。しかし實際その發達が完成されて了つたとすれば、カトリック教會は非常な困難に陥つて居るのだ。勿論さういふ一定不變

な信仰及び生活内容の固定は獨特な種類の利益はあるに相違ない。そこから大なる安心や感情の安定が生じてくる。それは生活の懷疑及び苦痛に於て殊に大なる意義を有する。且又、其中に有する人類の共通なる經驗は時代表面の變轉極まりなき潮流の奴隸となることを妨ぐるのである。しかしそれと同時に、固定の最も大なる危険を見過すことは出来ない。先づ第一に獨立の構成の代りに單に同じとを繰返して生活の根元が衰へる危険がある。もしかの方面に於て歴史の永續が特別な長所として誇られるならば、真正の永續は同じ形の固執といふことでなく、形は如何に種々雑多にならうとも同じ精神を維持して居るといふことであるを注意して置きたい。しかし茲ではそんな種々雑多な形を容れる餘地がない。若し時代の運動が實際かく大なる變化を顯はしたとすれば教理の固定は却つて生活の障礙となる。蓋は其信者の上に益々烈しい壓迫を加へ、且つ益々人工的の證明に努めるやうになるからである。中世紀に於ては猶多く

の形が相並んで立つことが出来たのだがカトリック教會は其中世紀の状態に反して益々狭いものと成つて了つた、それは初めは宗教改革の反對に由り、次には文明の反對に由つたのであつた。カトリック教會が人類の精神的運動に協同することが出来なければ出来ない程益々特別な教派となつて、外に向ては十分の結果を有して居るけれども眞の普遍性 (Katholizität) を失ふのである。

此固定の危険に加ふるに更らにかの中世紀の固定の特別な性質より生ずる紛糾がある。その特色は乃ち二の點にある。第一にはかしこに包括的生活綜合即ち各種の生活趣味の等一が宗教の下に完成されたといふことである。これ非常に大きなことであつて又獨特なものと云つてよろしい。茲には生の統一に對する人間の精神の熱烈なる渴望が認められ、其時代の状態に應じてそれが醫やされたのだ。其所にカトリック教に絶えず大なる意義を與へ、且つ其働を一切の生活範圍に擴がらしめる所謂普遍性がある。しかし中世紀式の問題の解決は到底

いつまでも満足する譯に行かない。彼の綜合の中に個々の要素が大體は出來上つたあるものとして這入つて來た、即ち古代の末葉に傳へられたやうな基督教、希臘殊にアリストートルの哲學、羅馬的制度等である。而して其結合の方法は內的一致でなく、又包括的全體の内部に於ける相互の浸潤でなくて、唯所謂階級主義の助力によれる巧妙な等一である。此遣方は慥かに反對を和らげ若くは目の前からそれを取除けることが出来る、けれど根柢から全くそれを取除ることは出來ない。近代は之に反して其獨立及び根元の渴望に依りて生の內的統一を主張して居る、かゝる統一は基督教をして精神生活の世界史的狀態と密接の關係を結ばしめんと欲するもの、殊に主張せねばならぬ所のものだ。

第二の要點は即ち次の如きものだ、精神生活を官能的具體化に結付けて唯目に見へ手に觸れることを以てのみ精神生活の完全なる實在となしたのは古代の末葉の疲勞困憊せる氣質に一致したのだ。それは大いに明々白々だといふ利益

はある、而して藝術と宗教との結合を助ける。しかしそれは又見えざる神の國が漸々見える教會の後ろに隠れて、人間が自己の能力に失望して、其確信を自己の精神的運動及び經驗の上に建てず、徹頭徹尾教會の權威の上に之を建て、畢いには神を信じ基督教の眞理を信ずると謂はんよりは、寧ろカトリック教會を信ずるに至らしめたのだ。斯ういふ考へ方は既にアウグスチンが次の言の中に自白して居る。曰く『カトリック教會の權威が余を動かさざりしならば、余は福音を信ぜざりしならん』と、それは中世紀に於て精神的に疲れ果てた國民に對して益々悪しくせられ、畢いに教會なるものが獨り眞理の支持者となり、且つ人類の道の道徳的良心とまで成つたのだ。かくして個人個人の獨立的生活は衰へて來るのだ。かゝる生活を得るにはどうして有ゆる問題を自ら解決するに努めなければならぬ。教會の偉大は却つて各個人を小さくして了う。此所には如何に事業に精勵しやうとも、又如何に奉仕の精神があらうとも強い確乎とし

た基督教は起りやうはない。

此危険に加ふるに更らに他の危険がある、それは教會が自分を最後の目的となして、同時に其地位の維持、その勢力の擴張てふことが他の一切の問題よりも先に立つといふことであつて、之に依つて内心が傷けられて所謂世事の中に引込まれて了う。そして宗教執着がはびこつて、精神の状態を思ふ心を蔽ひ、以て生を危ふし、又教會に對する功蹟は人間の内心の産物以上に過重せられるのである。

若し總て此事が近代に完成したる、若しくは實に要求せねばならぬ内心の獎勵と全く衝突するものとせば、昔の考へ方に固有な精神生活と物質的のものと束縛は新しい自由の思想と全然相容れぬものであることを忘れてはならぬ。即ち新しい思想は昔の解釋に於ける機密式(Sakramente)の供するが如き外部の事象と宗教的の働との結合をば魔術的のものと見做し、隨つて全く堪ふべから

ざるものと感ずるのだ。若し現代に於ても猶ほ僧正の訓令が『惡魔』のことを語り、これを否定することは不信仰の心の表白として取扱はれるとすれば、吾人近代人は世界の大きな分裂を感ぜざるを得ない。由此觀是、カトリック教の内部に於ては基督教の根本的革新、及び精神生活の世界史的狀態との一致は到底不可能であることは最早疑を容れぬ。茲では固定てふことは最後の言であり、且つ永遠の眞理は一時的の形式に拘束されて居るのである。

二 プロテスタント教

プロテスタント教に於てはカトリック教に於けるよりも遙かに調和に便宜なやうに思はれる。なせならば、プロテスタント其物の起原は傳説を打破したのであるから、運動の各理由を打消すことは出來ぬからである。加之ならず其歴史は甚だ種々な階段を示して居り、そして其各々のものに於て文明の全體と密接の連絡を有つて居る。さらばプロテスタント教に於て事物の今日の狀態とど

うして調和が圖れぬであらうか。

けれども事柄はかゝる説明の示すやうにさう單純でない。先づ第一にプロテスタント教は一個の進歩しつゝある發達の單なる一斷片を以て甘んじなかつた、むしろ濁され且つ誤られたる真理の必須の復興だと信じたのである。此真理は永遠に價値を有しなればならぬ。此意味に於てプロテスタント教と雖も亦カトリック教と同じく進歩思想の斷乎たる拒絶を含んで居る。唯その根本主張の精密なるものが彼れにありて一層の運動が出来るやうになつたといふことを示して居るのみである。プロテスタント教が基督教を教理に由れる壅塞から自由にして極力其主なる任務たる倫理的人格的生活の形成に呼び戻さうと勉めたことは實際偉大なる功蹟であつて、決して失ふべからざるものだ。かゝる任務に對して彼には基督教の固有の性質をば十分明かに顯はし、一切の外來の附加物を除去し、一般に宗教なるものを出來得るだけ獨立させるといふ測るべから

ざるものがある。そこで文明の問題の如きは最高い任務に對するときには其儘に棄て、置いて差支ない事柄となるのである。それに由つて文明は一層大なる自由を得、而してそれが宗教改革運動の最初の刺激が弱くなつた後に大なる影響を宗教生活の上に及ぼし、其時先づ宗教改革の根本特色と衝突しなかつたことが説明される。實際先づ啓蒙時代次に新人文主義 (Neuhumanismus) に由りて發展されたる新しいプロテスタント教は宗教改革と非常に離れたものであつて實に根本に於てそれと反對して居る。何となれば此新しいプロテスタント教は啓蒙時代に於ては一層理性的且實踐的な形を取り、新人文主義に於ては一層藝術的且世界人間的な形を取つて、彼にありては超越神教 (Deismus) の色彩を帯び、此にありては萬有在神論 (Pantheismus) の色彩を帯びて居るからである。唯人間の力ありとの喜ばしき感、内在に對する強き傾向、生活の內的矛盾及び闇黒に餘り重きを置かなかつたことは各共通である。

若夫れ偉大なる詩人が宗教改革の弟子となつたとすれば、それは殊に宗教改革に於ける世界人間的のもの即ち人格を高めることと、内の生活を復興することとが彼等に最終の要件と思はれたからである。それは又此事柄に對する彼等の地位が今日の状態と二の點に於て根本的に異なるものがあつたからである。即ち第一には、その時には猶ほ今日のやうに生活の構成を判然と眼の前に示し、容易い相互の混入をば全く不可能ならしむる歴史的意識がなかつたのだ、それだから藝術に於ても亦た實にレッシングやゲーテのやうな人々すら古代の世界の遠く隔つて居る階段を單に『古人』てふ概念の下に一括して了つたのだ、げに今日吾人が爲し得るよりも遙かに無造作な範疇に由つて考へたのだ。しかしそれから文明の概念に於て其時以來大なる變化が完成された。其當時は文明と云へば殊に理想の文明、即ち人間の内的形成のことであつた、かゝる文明は唯一層普遍的のものに向かつて居る基督教と一致するやうに思はれたのである。

今日はそれに反して一切の幸福を人間と其周圍との正しい關係より期待する實在的文明 (Realkultur) が勢力を占めて居る。而して若し其當時藝術が生を支配したとすれば、今は自然科学がそれに代つて生を支配して居るのだ、此種の轉回は宗教と文明とを遠く引き離して、ともすれば互に調和出來ない敵となすのである。然らば文明的宗教なる概念は最早維持することは不可能である。

總て此事は今日の状態を甚だ難かしくする所のものだ。理想的文明を自己の力で造り上げるといふことは到底吾人は出來ないやうに思はれる。そこで吾人は再び古典的理想文明に歸つて行つて、其の偉大と美とを確かめることに由つて吾人自身を強めやうと勉める。しかしそれと同時に現實主義 (Realismus) と十九世紀の經驗とは人間の存在に於ける多くの闇黒と紛糾とを吾人の眼前に見せた、そして多くの疑問を吾人に起さしめて彼の古典的理想主義に對する十分なる信仰を奪つて了つた。設令吾人がそれを固持したからと云つて、最早迎もそ

れでは満足が出来ない。若し吾人がそれを固持するならば吾人の歴史的な考へ方は、理想主義と宗教改革の基督教とを引離す大なる間隔、即ちルツテルの最も眞面目にして厳格なる倫理的な救済の宗教と古文學者の快濶な殊に藝術的の調子を帯びて居る萬有在神論との間に横はれる烈しい罅隙を見過すことは出来ぬ。

これに由つて吾人は基督教の必然の革新、即ち其最深の生の根源に溯ることがプロテスタント教の内部に於て完成せらるゝことを信ずることが出来やうか。恐らくはプロテスタント教が其の總體に於て反對の兩端即ち生の兩極を宗教と内在的文明の中に明かに吾の眼の前に示して居ると云ふことが出来やう。しかし此兩端があるからには、それを結合することは到底不可能だ。若し孰れに於ても歴史的の形から離れて必須の失ふべからざるものを發見しやうとすれば彼の兩端を生活の一層大きな全體の中に移して、そこで調和を求めねばならぬ。

ぬ。しかし斯様な企てはプロテスタント教の内部にはもう逆もないだらうし又プロテスタント教そのものが既に一個の難問となるであらう。其難問の解決は單り人生の全體の中のみ見出される。

吾人はプロテスタント教の内部に於て新しいものも古いものも認めることが出来るが、しかし其特色を正確に理解すれば、そが直接一教會内に於て一致し得ないことが分かる。何となればそれは單に相互の讓歩に由つて一致せしむる所の多少に關せずして、寧ろ方向が全く異つて居つて、嘗に教義のみならず又生の構成に於ても互に相反對して居るからである。此兩の種類を結合するものは蓋し人格と内的生活との共同の評價並に共同の『羅馬反對の戰爭』である、これしかし乍ら現代の大なる任務を負ひ得る程の強さの宗教的團體を産み出すには未だ足らぬものがある。兩の種類が斯くの如く相違して居る以上はそれと一個の教會組織の中に互に結付けるといふことは利益なきのみか却つて害があ

る、蓋は兩者が互に相戦つてそれに多の力を費し、内部の進歩は甚だ少ないからである。古い方の信者はたゞ理由なく新しいものを基礎のない侵入物と見做し、且つさういふものとして取扱ひ、新しいものはかゝる非難に對して世界史的の存在の權利を主張する。それも確かに一理ある。然らば何故にプロテスタント教は古い形に執着して居つて、己れの方で新しい形を創造せんと勉めないのか。

吾人が兩種類を各々觀察するならば、自分から現在の危機に打克つことは出来ぬやうに思はれる。古いものは古い基督教の贖罪説を含んで居る所の紛糾に甚しく捕はれて居る、而して其は徹頭徹尾聖書の上に其基礎を求むるが故にカトリック教よりも直接に聖書批評の喚起したる疑問や變化に觸れるのである。吾人は唯聖書に關する現代の評論とルタールの『聖書は精神の光明にして、殊に救ひ若くは必須の要求に關するものに於ては日よりも猶ほ明かなる事は一個の基督者に取つて確固不動ならざるべからず』てふ言葉とを比較するのだ。宗

教改革の基督教の確信をば世界の頹敗及び基督教に對する一般的文明の冷淡から分つとも亦不可能である。例へばメラニヒトンは次のやうに言つて居る、曰く『精神以外の人類全體は惡魔の世界、混亂せる闇の渾沌界に外ならず』と古い種類のプロテスタント教にはともすれば集中的な、しかし狹隘な宗教即ち『特別な基督教と一の單に世俗的で最高の目的と離れた文明とに崩壊しやうとする。

新しいプロテスタント教は時代及び科學の勞作との密接なる關係の大なる問題に對して公平だといふ長所がある。しかし乍ら全體として見るときにはプロテスタント教はやはり古典的時代の萬有在神論に傾き過ぎて居る。かくて宗教の必要な超越性を維持することが難かしくなる。吾人の生活に於ける闇黒なる反對のものはこゝでは十分なる評價と、夫と同時に又十分なる反應を得ない、而して形而上學と宇宙の神秘的な深さの認識とに由れる生存の轉向が十分強く完成されぬ。夫れと同時に宗教に峻嚴なもの、否定抗拒の力がなくなるといふ危

險が生ずる、それがなければ宗教は十分其任務を果すことが出来ぬ。

基督教の一層精密なる意義に關しては新しいプロテスタント教に秀で、居る教理の世界から耶蘇の人格への轉向が示して居る。よしこゝで一切の批評に對して鞏固なる仁核が主張されるにしても、生活全體を固め且つ浸潤すべき世界的宗教に對しては十分強くして且つ廣い基礎でない。一個のかゝる人格は唯一層廣い連絡からして其正しい光と其十分の意義とを得る。古い考へ方に依ればかゝるものを其贖罪説に於て見出した、吾人は唯之を世界に基礎を與へ且つ世界を高める精神生活の中のみ見出すことが出来る。しかしそれは吾人を特別な信條以上の別な途に導いて行くのである。

第三章 新基督教の必要

吾人は現存教會の内部に於ては現代の状態の要求するが如き基督教の根本的

革新を仕遂ぐるの希望なきことを確かめた。即ちカトリック教は餘りに頑固なるが故に革新を許さない、又プロテスタント教と雖も新しきものと古きものと反對に由りてかかる大なる運動の指導に任ずることを妨げられて居る。今日では個々の信條のみならず、又基督教、否宗教の上に難問がはびこつて來て、將さに生活の全體にも及ばんとしてゐることを考ふるときには、吾人は全く疑惑の雲に鎖されざるを得ぬ。吾人は吾人の生活及び本性の根本に於て惑ひを生じた。吾人の生存は外部に向つては如何に輝やいて行かうとも其意義は甚だ曖昧になつて、其の向ふ所を知らずして唯吾人は頼りなく生きて居るのみである。斯る危機の如何に大なるかを十分に認める者は、宗教革新の運動は特別なる教會の内部に於て反對を試みんが爲にあらざして、實に人類全體の拒み難き且猶豫し難き事件なること承認せざるを得ぬ。

昔の時代には一切の範圍を包擁し、又行爲に對して一個の統率的主要目的を

與へた生活及文明の理想といふものがあつた。此の理想が吾人に衰へて來て甚だ稀薄になつた。尤も過去の偉大なる人人は亦た吾人に向つて教を垂れて居るのであるが、しかし吾人の内的生活をば十分に覺醒するには猶ほ足らぬものがある。彼等の精神は十分吾人に徹底されないで、吾人の内部を熱せしめせねば又敢て吾人の本性を進歩せしめせぬのである。しかし乍ら生存の表面に於ける勞作が吾人に在つて大なる任務を見出して、それを驚く程進まして行きつゝある。吾人は此任務に益々強く捕へられて、種々の領分は其特別な種類に従つて生活及び行爲の全體を形作りしめ、而して其形を總ての者に專斷的に推付けやうとする傾が益々大きなつて來た。されば茲では決して單なる個人の思想や時代表面の一時的潮流の問題でなく、實に最後の主權を得やうとする眞實なる生の發展の問題である。しかし此の生の發展には主なる活動を周圍との接觸の中に移すことゝ、以前に内的生活として卓越せる要件と思はれた總てのも

のを推し退けることゝ又それを萎縮させることゝは結び付いて居る。

かくて現代の自然科学は其卓越せる特色に基いて吾人の周圍の自然を現實の全體だと宣言して居る、此全體は吾人の精神生活を残らず自分の中に入取るべきものである。而して自然科学は夫れと同時に以前特有の性質と特有の價値とを有する如く思はれた總てのものを犠牲にして、殆んど人類の歴史的勞作の意義を認めない。又社會的運動なるものは外部のものに由りて内部のものを推し退け若くば吸収した、即ち社會運動は經濟的問題、人間の經濟的幸福てふことをば有ゆる他の問題よりも重んじ、それが爲めに一切の努力を要求し一切の力をそれが爲に用ゐしめ、而して其問題の解決の方法は同時に生活の特色全體をも決定し、且つ内部の問題をも決定するものと信じて居るのだ。又單なる個人個人の享樂の慾望を充さんとする所謂主義主義 (Aesthetizismus) 及びエピキュラス主義 (Epikureismus) も内的生活を甚だしく推し退けるのである。感情の益々

文弱に流るゝことゝ、生活の動き易く、なつて益々分化することゝ、宙に浮いて居る氣分の一切の物質的拘束から離れるゝことゝ、是等總てのものは生の獨立に對する中心湊合の妨げをして、其統一を破り、且つ生活を全く皮相のものとして了うのである。かくて外界の生長、生活條件を自當とする勞作の生長、人間の印象及び感情の團まりと化すること等は皆精神の獨立自存を破壊し且つそれを求めることすら無意義なことゝ思はせる働をして居る。是等のものはかゝる方面に向つては益々確實なる働を作し、自ら必要缺くべからざるものと思つて居る、それは是等のものに對しては内部から人間全體の理想が働かず、是等のもの、背後には勞作の功蹟なるものがあつて、その有益なることは何人も疑ふことを得ないからである。そこで生活に對する關係を纏らせるものは單なる主觀ではなくて、生活其物の中に難問のあることが分る。それが益々周圍に推遣られて中心がどうなるかを見ないのである。

生活の發展は唯生活の發展にのみ匹敵する、是れに單なる理論を對立させるといふことは妄想を以て實現と戰ふやうなものだ、されば吾人がもし統率的中心を見失はず又それよりして生活を構成することを斷念せず、周圍の形の崩壊をもかゝる中心の激勵となすならば、そこかうしてある獨特の生活の發展は來り生活の平衡を確かにするのである。かゝ發展は單に過去に由るのみでは得られない、何となれば總て過去のものゝ吾人が現在の紛糾に陥ることを防ぎ得なかつたからである、されば吾人は此大なる問題を獨立に取上げて、吾人の生活の内心を猶一層求めることに努めねばならぬ。吾人は此内心を強めて其中に新なる深さと、事實と、連絡とを發見して、竟いに内部の世界に到達せねばならぬ。これ吾人の上に侵入し來る外部の世界に匹敵し且つ之を超越し得る所のものである。それには進歩發展がなければならぬ、單なる推測や熟考のみではない。吾人はかゝる内心を強くすることをば人間を一個の精神的生活及び精

神的世界に着密せしむることに由つて仕遂げやうと勉めたのだ。

しかし全體より來る生活の發展の問題を新しい方法に於て取扱はふとすれば、どうしても現實に對する吾人の地位全體を疑問に上ぼして、必要の目的に對して吾人の能力のあり丈を盡さねばならぬ。吾人は又間もなく此企ての偉大と共に危険も亦大きく成ることを認める。吾人は全體から全體に向つて努力しやうとすれば、必ず頑固なる反對と其内外に於ける障礙が明かになつて來る。又それと根本的に分れて、希望に滿されてそれに反抗するのには、吾人はどうしても宗教への轉向を必要とする。かくて人間及び人類の精神的自己保存の爲めの戰は必然的に吾人を驅つて宗教に至らしめるのである。

宗教は其主なる長所を障礙及び反對の價値を認むること、その征服との中に有して居る。一般文明は此等のものを排棄して、出來るだけ眼の前から取去らうとするのであるが、宗教は明かに其征服を仕遂げたのである。宗教は直接の

生存を超越して、新なる世界を超越せる生活を開顯することを得るが故に生活を停滯させずに之を完成することが出来る、しかしかゝる生活の開顯の後と雖も宗教は敵を單純に消失せしめない、むしろ之を固持して之に由りてふ斷然運動と緊張とを生活の中に持來しつゝあるのだ。宗教の特徴と偉大とは最初力強く否定した後肯定に突進して行つて、肯定に於ても亦否定を失はない所にあるのだ。宗教は吾人の生活が大なる紛糾を有してゐるが又大なる勝利も其中にあることを確かめ、而して兩者を密接に結び付けて、彼のものに對照的特性を與へ、而して一個の間斷なき運動を産み出すのである。それからして愈々新なる力と轉向とは出て來るのだ。加之ならず宗教は再び最後の根本を捉へて一切の制限に對して無限を立て、一切の時間に對して永遠を立てることを得たのである。此事が明かに顯はれて十分の長所が感ぜられる所に、宗教は一切の他の生活に對して一個の超越性を得、そこに宗教に反對する一切のものを征服し、

打ち亡ぼし、凡て宗教に關係する者に無限の力を與ふるのである。而して前に人間の精神全體を捉へて居つた凡てのもの、殊に宗教の否定すらも亦宗教の一種となつたことは經驗が能く之を示して居る所である。現代の自然主義及び社會主義に於ても亦さうである。

若夫れ深める力と生氣を與へる力を有つてゐる宗教に歸つて行かずに、現代文明の無精神なること、一切の内心の萎縮とが得て征服すべからずとせば、吾人の説明は進んで宗教の復活は直接に基督教に導き、其世界史的功蹟は新なる世界の建設及び人類の高擧に全く必要缺くべからざることを示して居るのだ。即ち道德的弛緩を來せる現代は基督教の道德的勢力に由つて覺醒と再生とを切實に要求してゐるのだ。基督教の中には無限の力が潜んで居り、そして其力は決してまだ用ひ盡されないうで、いつでも再び發顯して來て、最初の勢力を以て人生を驅つて新なる途に至らしめることが出来るのである。神的のものと

人的のものとの觸接は革新の働をするけれども又破壊の働をもする惡魔の力を産み出すのである。それを程よくして有効なる勞作に導いて行くのは、蓋し宗教的團體の主なる任務である。しかし時代の經驗するに従つて此特別な領分は狭くなり、且つを硬まつて來る、其時には宗教が元始的力を要求して新なる活動を喚び起さねばならぬ。世界的宗教は既に完成された事實にあらずして寧ろ今猶ほ世界を浸潤しつゝある一個の運動である。現代に於ては丁度さういふ風になつて居る。

實に公平に時代を觀察するものは、今日教會なるものが宗教を進めて行かずに、却つて其進歩を害することの多いことを疑はぬであらう。一二の自然科学的附加物を有する古い啓蒙主義の薄められたるものに過ぎない彼の自然主義的一元論 (der naturalistische Monismus) は若し教會的宗教が現代の自然科学に對して常に個々の結果に於けるのみならず、又直接に全體の考へ方に反對する世

界の形を維持しなかつたならば、果してかく多くの、決して單に否定を事とせない人人を引着けて之を固持するのであらうか。而して獨逸の社會主義は實に英語を話す國々の夫れと反對に若し教會の中に『玉座と祭壇』とを保護しやうと約束する國家的施設を認めないとすれば、斯くの如く烈しく宗教及び基督教に反對するであらうか。且又教會の勤務に一身を任ねるもの、數、及び活潑に教會のことに關與するもの、數が總ての國々に於て絶えず減じつゝあり、往々驚くほど減ることは數字的に確められる事實であつて、決して不親切な説明でない。吾人は斯の如く宗教より遠ざかるとを以て靜かに満足して、益々それを烈しくすべきであらうか、吾人は唯教會を侵すことを懼れて、如何に宗教が生かすに消え失せて行つても唯袖手傍觀すべきであらうか。乃至吾人は宗教を教會の上に置いて新しい道を求むべきであらうか、吾人はこゝで『必要は最良の忠告者なり』てふゲーテの言を思ひ出さざるを得ない。

吾人はかゝる確信を懷きながらも決して教會の敵だとは思はない。教會が今日も猶ほ生活を固め且つ深めること、人間の生存を徳化するとに於て爲したるものを十分に尊重するものである。しかし若し全體が最早精神生活の世界史的の狀態に一致せず、或ひは全くそれと衝突するときには、個人個人の一切の精勵は全く無駄なものとなることは、實に人間の狀態の悲劇的なものに屬する。今日の教會は實際かういふ風であるからして、基督教の固持と教會に對する否定的の態度とは一致せねばならぬ。

吾人が精神生活の世界史的の狀態を凡てのことに於て標準と爲しても、それは必ずしも一時的の狀態に眞理を引渡して了うといふとでない。何となれば常に變化し常に反對に傾く人間の思想及び氣分の動搖は一變して、又世界史的の建設、時代の特別な狀態から離れるとに由りて完成される精神生活の開發々展は一變してくるからである。かの精神生活に對して十分に批評的に且つ懷疑的で

あるとは出来ぬ。此勞作も亦實に時代表面の潮流に對して不斷の戰爭を爲した。之に反して一個の永久的の眞理内容の作出さうとするものは吾人の努力を催進し且つ成就せねばならぬ。それからして深く且つ續いて人類に働かうとするものも反對するとの出来ない世界史的の狀態は出て來たのだ。古今の時代を一貫せる精神と時代的精神といふものは根本的に異つたものである。古今の時代を一貫せる精神を捉へやうとする者は時代的精神から解脱せねばならない。而して古今の時代を一貫せる精神は今日新しい葡萄酒を新しい革囊に注ぐやうな宗教生活の革新を要求して居る、しかしかゝる革新は直接に宗教の爲めでなく、實に人類の精神生活、精神的文明、人間の人格を救はんが爲めである。かゝる世界史的の必要から出て來たものは、その目的に達する道は今日如何に困難であらうとも成功の確かなる保證を有して居る。しかし生活が益々精神を失ふことが個人に直接感せられ、而して單なる楽しい劇であつたものが苦しい經驗とな

り、それと同時に若し全體が失はれるならば個人の地位に於ても又特別な方面に於ても精神的價值が維持されず遂には善も美も、然り眞も最早語るとを得ず、愛も義も光榮も馬鹿らしい想像となつて了ふ、其瞬間に於て人間はかの若返へる運動の爲めに全力を捧げるものたらしめるとが出来る。此運動が先づかゝる力に達するならば、それは直ちに適當な形を見出すであらう

吾人は今日尙ほかゝる轉向から遠ざかつて居る。先づ探求の方向を定めることの爲めに戦はねばならぬ。しかし之れを求むる人人は多い。彼等は一層努力の共同を認知し、互に相接近し、而して先づ前進の活動に必要な外部の條件を恢復する爲めに働かねばならぬ。獨逸に於ては教會と國家との關係、取も直さず切に一の變化を要したるプロテスタントの國教會の存在は宗教の利害に關係する。國教會の辯護者は基督教が今日遭遇しつゝある非常なる危機を甚しく悔り、而して更らに國家が宗教改革の時代以來經驗したる變化をも亦眼中に置

かぬやうに思はれる。若し同種の宗教的確信が國民全體を支配しつゝありとせば、教會の指導を國家に譲り渡すといふことは大なる利益があるであらう、しかしもし時代が現代のやうに烈しい宗教的反對に由りて分裂さるるならば、事實は全く之れに異つてくる。何となれば其時には國家は一の宗派を獎勵して他の宗派を壓迫する譯にも行かねば、又仲裁を勉める譯にも行かぬからである。それは到底不可能な調和であつて、結局何人もそれに満足せぬであらう。且又舊い國家は代議政體であつて黨派の權力の鬭争の行はるる新しい國家よりも遙かに大なる固執を有して居る。かゝる状態にありては教會と國家との結合は多くの不正なる壓迫を産出するのだ、殊に學校に對してさうである、そしてそこに虚偽の雜草がはびこり易いのである。壓迫と虚偽とが一緒になつて絶えず宗教に對する憎惡と憤怒とを産み出し、而してそれは反感を懷けるものをして教會なるものを全く政治上の便宜の爲め施設せるものと思はしめるのである。ヤト

の事件は現在の組織の維持すべからざることを明瞭に眼の前に示して居る。宗教上及び哲學上の題目に關する辯論俱樂部に墮落せざらんとする各教會が其職から若干の根本確信を要求せねばならぬことは殆んど争ふべきことでない。又當面の事件に於て所謂教會的の信仰から離れることは頗る著しいものであつたといふことも殆んど争はれない。さらば外形上殆んど攻撃することの出來ない判決委員會の決定がかく多くの反對否憤怒を招いたのは抑もどういふ譯であらうか。それは國教會の名に於て行はれる裁斷が其宣告を受けたものを其の國民の宗教的團體から排斥して、それに由つて彼に或る汚辱を蒙らしめ以て彼をして宗教的活動を困難ならしめるからである。さればプロテスタント教會が國教會の特質を有する間は、此種の制度は決して自由な考の人人を許し得ぬであらう。もし學問に於て最後の斷定の際に間違つた結果が生ずるとすれば、吾人は前提に於て誤謬があるものとせねばならぬ。斯くの如く此事件は國家と教會との

結合が宗教に取つて福があつた時代が過去にあつたといふことの良い證據を供給するのである。畢いに此古い結合の分離が性急な方法で行はれるを要せずして、平靜なる熟考に由りて争はずして出来ることは、最も新しい瑞西國民が確かなる例證を示して居る。

同時に教會と國家との分離は宗教の若返へつて力強くなることの要件として大なる意味を有し、且つそれが唯彼の方面に向つての活動を容易くする條件の恢復のみであることを記憶せねばならぬ。教會と國家との分離、及びそれに由つて來るべき統一的教會の瓦解は先づ多くの誤解、紛糾、改宗、否定等を喚起することは全くありさうなことである。しかしそれと同時に最も緊要な一事は得られる。それは即ち完全な眞實てふことである。實に唯此記號の下にのみ宗教の再興と生活の無精神の征服とは行はれる。若し總ての人々に取つて神聖でないのに、而かも神聖でなければなかつたとすれば、又此神聖なりてふ信仰に於て

半眞若くば虚偽が行はれるとすれば、吾人の生の眞髓は侵されて、吾人の人格の全體は弱くなる、かゝるものを根本的に驅逐するにあらざれば、吾人は到底現代の精神的危機から遁れることは出来ない。プロテスタント教は唯便宜てふことによりて完全なる眞實に反對し、且つ不快なる結果を恐れて内的必要を壓迫してはならぬ。一體プロテスタント教は内的必要を大膽に遂行する所に其存在の權利を有するのだ。其指導者は次のやうな烈しいことを言つて居るではないか。曰く、『誹謗はよし來らば來れ、困難は鐵を破る。誹謗も敢て恐るに足らず。我は我が精神に危害を及ぼさざる限り、弱き者の良心を愛護すべし。否らざれば我は我が精神に告げん、然らば全世界若くは世界の半ばは怒らんと。』
 ムツテルの此言は畢いに此問題の到達する所を明かに示して居る。唯實利主義なる人間の文明の生活よりも一層高い生活を知つて、それを承諾し、それと同時に宗教は人間の忻求と希望との單なる結果にあらずして、むしろそれは吾人

に世界を超越し、浸潤する事實を開發し、而してそは吾人の生活の中に輸入するといふ確信を懷き、且つ宗教は第一に人の事業にあらずして神の事業だといふ信仰を有する者でなければ大なる運動の中に這入り込んで、大膽に且つ快濶に大なる戦闘に参加することは出来ぬのである。若しかゝる點に於て人人が一層鋭く分離し、それと同時に吾人の生活の中に截然たる決斷を要求して居るとすれば、それは唯生活の眞實及び力に對する利益のみでない。公明にして大膽なる前進によりて來るべきものに關する一切の疑懼の念に對しては次の熟慮をすゝめたい。『宗教は單に傳説と社會的秩序によりて聖別されたる人間の欲望と觀念との産物であるか、—さらば藝術も權力も乃至策略も精神的運動の進歩がかゝる製作物を破壊することを防ぐとは出来ない。或ひは宗教は超人間的の事實の上に建てられてあるか、さらば如何に烈しい攻撃と雖もそれを搖がすことは出来ぬのみならず、寧ろ竟いに人間の有ゆる困難と勞苦とを経て宗教の眞の

長所の點に達し、而して其永遠の眞理を純粹に開發する用を勤めねばならぬ。』
と（宗教の眞理内容）

吾人の疑問は吾人が今日尙基督教徒たり得るや否やてふことであつた。之に對する吾人の解答は吾人は常に基督教徒であり得るのみならず。又どうしても基督教徒でなければならぬといふことである、しかし基督教が一個の進歩の中途にある世界史的の運動として認められ、而して教會的頑迷から覺醒されて、一層廣い基礎の上に据えられるときに、始めて吾人は基督教徒となることが出来る。夫故に此所に時代の任務と將來の希望とはあるのである。

吾人は尙基督教徒たり得る乎終

不許複製

大正十一年一月廿七日印刷
大正十二年二月廿一日發行

□ 定價十七錢 □

譯者

額賀鹿之助

發行者

福永文之助

印刷者

渡邊為藏

發行所

警醒社書店

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
東京市京橋區日吉町十番地

(振替東京五五三番)

□ 民友社印刷部印刷 □